筑波大学新聞

第337号
編集責任
筑波大学新聞
編集代表
福原直樹
TEL:
029(853)2040・6699
E-mail
shinbun@un.tsukuba.ac.jp
月　刊

発行所
筑波大学
茨城県つくば市
天王台1－1－1

保健管理センター

診療サービス 有料化へ

運営経費 年1千万円不足

筑波大学保健管理センターが現在の無料診療をやめ、有料化を検討していることが、同センターへの取材で分かった。来年度中の実施を視野に入れているといい、これと並行し同センターは組織の効率化や業務内容も見直す方針だ。同センターは近年、国から各国立大学法人へ配分される運営費交付金の減少が影響し、年間の運営経費が10年前の約6割となり、年間約1000万円不足している事態が常態化していた。

（秋田耕平＝社会学類2年、井手真琴＝国際総合学類1年）

同センターは1973年の開学と同時に開設。学生への福利厚生を目的に内科や整形外科、歯科、精神科の診察や薬の処方を無料で行ってきた。同センターによると平成28年度の利用は年間1万件ほどで、4年度（約7000件）から約3000件増加。28年度の利用者の約半数が精神科を受診していた。

だが、国から各国立大学法人へ配分される運営費交付金の減少などが影響し、同センター全体の運営経費は21年度の約3400万円が28年度には約1800万円に減少。一方、薬剤費は毎年1100万円程度と変わらず、予算が減少した分、同センターの経営を圧迫していた。

このため、同センターでは昨年度から診療の有料化を検討。この際、一般の医療機関と横様、健康保険での診療を検討したが、▽診察料を計算するシステムが複雑になる、▽一般住民の利用も視野に入れる必要がある……などの理由から、健康保険での診療を行わず、学生に負担がなるべくかからない方向で診察料を求める予定だ。具体的な負担額は数百円から数千円を想定し、一般の医療機関より安くする方針だ。

取材に応じる太刀川所長（8月4日、保健管理センターで）＝井手真琴撮影

一方、同センターが実施する教職員対象の健康診断の項目を減らし、経費削減も図る。健康診断の経費は、受診者の増加や検診に必要な機器の費用増大などのため、19年度の約2600万円が28年度には約6100万円と約2・3倍になっていた。また法律で定められた検査項目以外のがん検診なども無料で行っており、これらをやめたり、有料化すると考えている。

同センターの太刀川弘和所長（医学医療系・准教授）は「有料化で学生には負担をかけることになるが、サービスの質の維持のため理解してほしい」と話した。

同センターと同様の診療サービスを実施している大学では、東京大学が薬の処方や検査料金を徴収しているほか、慶應義塾大学が健康保険の基準に従って診察料などを徴収。また早稲田大学が一般の医療機関と同様に保険診療を行っている。

全学計算機システムの印刷機

5学類で枚数削減

筑波大学生が使う全学計算機システムでの印刷について、5つの学類が8月までに、年間の印刷上限数を最高で当初の半分に削減したことが学術情報メディアセンターなどへの取材で分かった。3月の同システム更新による新型印刷機の導入で、印刷費が1枚5・3円と、以前の2・01円から2・6倍に高騰したためだ。当初、業者は印刷費を以前と同程度に見積もっていたが、新型機が予想以上にトナーを消費し高騰したという。この事態を受け、同センターは学生に印刷費の負担を求める課金制印刷機の導入の検討も始めた。

（木村誠＝人文学類1年、横山瑞樹＝社会学類1年、10面に関連記事）

印刷費が1枚当たり5.3円に高騰した新型印刷機（8月30日、1C棟で）＝木村誠撮影

印刷費 2・6倍に

筑波大生は図書館や、学生用パソコンがある学内のサテライト室の印刷機で、所属学類が定めた印刷枚数まで印刷できる。各学類への取材によると、印刷費高騰を受け社会、地球、数学、物理、化学の5学類が今年度の印刷上限枚数を削減。これ以外にも来年度以降、枚数を見直す方向で検討中の学類もあるという。

社会学類では、今年度1000枚としていた印刷上限数を8月、200枚に削減。その後学生の要望で500枚に戻した。そのほかの4学類では年度当初の1200枚から800枚に削減した。

システムを管轄する同センターは3月末、附属図書館やサテライト室などのパソコンを最新機種に更新。同時に、新型印刷機を導入した。業者は新型では1枚が更新前の2・01円から2・4円になると予想。同センターもこの費用増を許容範囲内と判断したという。

だが6月、トナー消費量が予想を大幅に超過。調べたところ、トナー1本で印刷可能な枚数が業者の予想の半分程度だったことが判明し、同センターはこれを7月、各学類に通知した。

学群生の場合、印刷費は100枚までは同センターが負担。それを超える上限枚数までは各学類にも負担を求める。印刷費の増加を受け、今年度同センターは自らの負担額を昨年度の700万円から1600万円へ増額したが、それでも1枚当たりの学類負担額は1・56円と、更新前の0・27円から約5・7倍になるという。同センターでは業者と協議し、7月から印刷機の設定をトナーの消費を抑えるモードにする対策をとったが、この効果は11月にも分かる見通しだ。

学生負担も検討

同センターによると、同システムは5年後の更新までは現在の印刷機を使用する。来年度以降については、業者にトナー購入費の値下げを求めるなどして、費用を抑えたいとしている。

なお亀山啓輔同センター長（シス情系・教授）は、課金制印刷機の導入について「できるだけ早い時期に導入したい。設置場所は中央図書館など利用者の多い場所に限定するつもりだ」と話している。

昨年度、学群生が印刷した枚数は全学平均で一人当たり408枚。上限枚数が削減された5学類では社会509枚、地球703枚、数学340枚、物理450枚、化学422枚だった。

平砂地区北の商業施設計画

「カスミ」「サザコーヒー」入店の見通し

筑波大学が平砂学生宿舎（つくば市天久保）の北側にある大学内の敷地に商業施設を建設する計画で、茨城県を拠点とするスーパーマーケットの「カスミ」（本社・つくば市西大橋）と、筑波大とコーヒーを共同開発し、それを販売する「サザコーヒー」（本社・茨城県ひたちなか市）の2社が入店する見通しとなった。商業施設は早ければ来年10月にも開店する予定だが、平砂地区周辺の買い物に不便だった問題が解消することが期待されている。

（石川泰行＝社会学類3年）

カスミは茨城県を中心に約180店舗を展開し、つくば市では13店舗が営業。毎週土曜日には、一の矢学生宿舎（つくば市天王台）とグローバルヴィレッジ（同市天久保）の2カ所に移動販売車で日用品や生鮮食品を販売する「移動スーパー」を運行する。サザコーヒーは茨城県を中心に10店舗以上を展開。昨年10月からつくば市内の2店舗で筑波大と共同開発したコーヒーを販売している。

平砂学生宿舎から北に徒歩3分ほどの位置に計画されている商業施設のイメージ図（広報室提供）

同計画の公募は7～8月に行われ、カスミとサザコーヒーの2店舗を含む商業施設計画を提案した鹿島リース（東京都港区）が優先交渉権を獲得。基本協定を9月19日に締結し、今後、大学との協議を経て、早ければ年明けにも正式契約が結ばれる見通しだ。

商業施設は平砂学生宿舎共用棟からペデストリアンデッキを200㍍ほど北上した場所にある広場に建設される予定。約1400～1700坪の敷地内には駐車場や駐輪場も整備され、学内外からの利用が想定されている。周辺にはスーパーマーケットがなく、大学周辺の地理に不案内な留学生から買い物に不便だという声が上がっていた。

事業開発推進室の山田哲也室長は「営業時間などの詳細については今後の協議を通して決める。学生だけでなく、地域の人にも来てもらい、にぎわいのある場所にしたい」と話している。

筑波おろし

九州北部を7月、豪雨が襲った。1時間に100㍉以上の猛烈な雨が10時間も降り続き、死者36人、行方不明者5人という甚大な被害を出した。多くの建物も倒壊し、道路は寸断。それらの惨状をメディアは大きく報じた▼この豪雨の報道で気になったことがある。メディアは被害を刻一刻と伝えはしたが、それが果たして人命を救うことにつながったのか、ということだ。もし、記者がセンセーショナルな画像や記事を追うことに腐心していたのなら本末転倒ではないか▼1955年5月11日。岡山県と香川県を結ぶ「宇高連絡船」が沈没する事故があった。船には修学旅行生が多数、乗船しており、児童ら168人が死亡する大惨事となった。この時、ある写真記者が助けを求める乗客を撮影した。その写真が掲載された後、「なぜ撮影の際、記者は乗客らを救助しなかったのか」という批判が出た▼大学新聞の記者になって1年半。自分の写真、記事への反響がそれなりにあり、「伝える」ことの重要さを感じてきた。だが、仮に私が写真記者で連絡船の事故を取材していたら、といつも考える。「報道の使命」とは一体何なのだろうか、と▼10月15日から新聞週間が始まる。「新聞・放送に携わる者が言論・報道の自由を守ることを考える週間」（日本新聞協会）だという。新聞週間を機に、伝える」との意味を考えたい。

注目記事

変わる大学 入試改革 2
サマフェス 夏の曲集う 5
蹴球部J1大宮に惜敗 8
水泳 女子がシード権 9
学内でVRの祭典 10
欧州見聞録 チェコから 11

狂言を演じる「なこみ狂言会」

ミニ特集 3
筑波大生と健康診断の今
特集 6,7
図書館の苦悩
電子ジャーナルの価格高騰

筑波大の入試改革どうなる？

「総合入試」７年目の北海道大を取材

【北海道大学（札幌市北区）で秋田耕平＝社会学類2年、田中開＝教育学類4年】筑波大学は平成33年度をめどに「大括り入試（仮称）」を導入する方針だ。入学定員の約半数を従来の学類別では入試なく、専門分野を超えた枠で選抜するもので、残りの定員は従来の学類別入試で選抜する予定。文部科学省が32年度から行う大学入試センター試験の改革を意識しており、入学者は1年次に基礎・教養教育を重視する科目群を履修。その後、大括り入試での入学者は成績などを基準に2年次から希望学類に進める。類似の制度を実施する北海道大学を取材した。

北海道大学前期日程の募集定員

総合入試		学部別入試								
						医				
文系	理系	文	教育	法	経済	医学系	保健学系	歯	獣医	水産
100	1027	118	20	140	140	97	142	30	20	105

（人）

※理・工・薬・農の各学部は前期日程で学部別入試を行っていない
※総合入試理系は数学・物理・化学・生物の各科目の配点を２倍にする選抜と各科目の配点が等しい選抜がある

（参考）筑波大学の学群別入学者定員

人文・文化	社会・国際	人間	生命環境	理工	情報	医	体育専門	芸術専門
240	160	120	250	520	230	234	240	100

（人）

変わる大学

■北海道大の現状

北海道大は23年度から従来の学部別入試に加え、「文系」（定員100人）「理系」（同1027人）の大枠で選抜する「総合入試」を導入。「入学した学部では思っていたような学問を学べない」などと訴える学生の増加を受けたものだ。

理系の定員が多いが、北海道大アドミッションセンターの池田文人准教授によると「文系は学部ごとに学ぶ内容が全く違うが、理系は例えば生物学を学びたい場合、理・医・薬・農・獣医・水産学部など複数の学部で学べるため、理系の受験生の方が学部選択で悩む傾向が強いことが理由と言う。

総合入試での入学者は、学部別入学者らと共に1年次は「総合教育部」に所属。基礎・教養科目や語学などを履修する。この間、学びたい分野を明確にするのが狙い」（池田准教授）で、1年次終わりに進学希望の学部を決め、成績順に2年次から希望学部に配属。成績などで文系学生が理系に、理系学生が文系に進むのも可能で、昨年度は14人がこうした進路を選んだ。

筑波大への取材によると、筑波大が考える制度も北海道大と似ている点がある。筑波大の場合、新入生は1年次、共通の教育課程で現在の「総合科目Ⅱ」を再編した授業や語学や体育を履修。その成績と学生の希望で2年次から各学類に進む形をとる方針だ。

成績評価のブレに課題も

■北海道大生の声

北海道大の改革について同大生に取材した。

理系入学の男子1年生は「工学部志望で入学したが、学ぶうちに農学分野にも興味が出てきて、農学部に（希望を）出すかもしれない」と話す。

一方、文系入学の女子1年生は「理系へ転身可能と思い入学したが、履修を組む段階で諦めた。文系では最初の履修時点で行きたい学部向けの授業を取る必要があり、理系のように進学先を熟慮する余裕はなかった」と話した。

また後期日程の学部別入試で理学部として入学した女子1年生は「総合教育部では自分が学びたい専門が大まかにしか学べない。1年次から専門的な科目を履修したかった」と話した。

取材に答える北海道大アドミッションセンターの池田准教授（9月8日、北海道大で）＝秋田耕平撮影

■課題

北海道大にも課題がある。

その一つが教員や科目ごとに成績評価の基準が異なることだ。総合入試での入学者は1年次の成績で2年次以降の移行先が決まる。だが池田准教授によると、これは「成績評価の基準が授業ごとに違い（教科の選び方で成績が決まり）それで移行先が決まるのは不公平」「良い成績が出やすい授業に履修が集中する」などの批判があった。

そこで27年度から成績評価を5段階から11段階に細分化。教員にシラバスに基づく正確な評価のほか「成績評価基準のガイドライン」を改定し、評価分布が偏らないよう求めた。また、学生に前年度の授業の評価分布を公表。各授業の成績評価の妥当性を学生が判断できるようにもした。

同センターの飯田直弘准教授（比較高等教育論）は「また改善の余地はあるが、成績評価の正確さは、23年度以前に比べ格段に向上したと思う」と話している。

学長らと学生が直接議論

学生60人が参加　教育や学生生活が話題に

学生からの質問に答える永田学長（7月18日、2H 棟で）

学生や副学長と学生が意見を交わす「第1回学長・副学長と筑波大学生との懇談会」が、全学学類・専門学群代表者会議（全代会）の主催で7月18日、2H棟で行われた。懇談会には永田恭介学長や清水諭副学長（教育担当）、玉川信一副学長（学生担当）と学生約60人が参加した。

冒頭、永田学長が今後の筑波大の構想を披露。現在検討が進められている学位プログラム制など今後の教育改革について「学生が求める教育体制に変えていく」と語った。

その後、学生から永田学長らに対して教育や学生生活などに関する質問が行われた。文化人類学を専攻している男子学生（人文2年）からは「所属する専攻の教員が減少している中で、今後の専攻の存続などについて不安に感じている」との意見が出された。これに対し、永田学長は「筑波大は全国の国立大学の中でも人文社会系の学問を重視している。これらが無くなることはない」と答えた。

懇談会を主催した全代会議長の鈴見柏吾さん（物理3年）は「学生が学長らに直接話す場を作ることができ、初回としてはよかったと思う。次回以降は参加する学生を増やしたり、議論のテーマを設定するなどよりよい懇談会にしていきたい」と語った。

全代会は11月にも今回と同様の懇談会の開催を予定している。

（秋田耕平、写真も）

出版社や学者の枠超え議論

日本語教科書シンポジウム

日本語を学ぶ外国人向けの教科書の在り方について、出版社や学者といった枠を超えて議論するシンポジウム「日本語の教科書が目指すもの―教科書執筆者・活用者と語る―」が、9月10日に春日エリアの情報メディアユニオン棟で開催された。筑波大学グローバルコミュニケーション教育センター日本語・日本事情遠隔教育拠点の主催で、日本語学校や大学の教員、出版社の社員など、約200人が参加した。

これまで、日本語を学ぶ外国人向け教科書は、出版社ごとに作成を行うのがほとんどで、今回のように、出版社や学者といった枠を超えた、業界全体での議論の場はなかった。

午前の部では、大手教科書の執筆者や活用者らが、執筆の経緯や現場での活用法、今後の教科書の製作方針や懸念点などを発表した。午後の部では、今後の日本語教科書や日本語指導の在り方について、パネルディスカッションを行い、参加者らが、活発に意見を交わした。

主催した伊藤秀明助教（人社系）は「筑波大は日本語教育のリーダー的存在だが、大学という中立な立場を活かした意見交換の場を設けられてよかった。今後は業界全体でより良い教材開発の視点を養っていきたい」と話した。

日本語学校で教員を務めているという参加者の筑波大大学院生は「学校で利用する教科書を選ぶ参考にしたいと思い、参加した。今後、どんな教科書を選ぶべきか考えることができた」と話した。（越智小夏＝比較文化学類2年、12面に関連写真）

中央図書館
期日前投票所

衆院選での設置見送り

つくば市選管　「突然の解散で」

筑波大中央図書館の期日前投票所が、10月22日投開票の衆議院議員選挙では設置を見送ることがつくば市選挙管理委員会への取材で分かった。衆議院の突然の解散で、これまで使用していた同図書館の集会所を確保できなかったことが原因という。

同投票所は筑波大生らが市に働きかけ、昨年7月の参院選以降、同11月のつくば市長・市議選、今年8月の茨城県知事選で各3日間ずつ開設された。しかし、利用者数は最多だった参院選（441人）から減少、市長・市議選では390人、県知事選では306人にとどまった。また、県知事選での利用者の大半は大学職員や近隣住民などの30歳以上で22歳以下の利用者は20％程度と学生の利用率の低さが課題となっており、同選管が利用を呼びかけていた。

同選管の田中晴事務局長は「大学内のほかの場所での設置も検討したが準備期間が短く投票環境整備が間に合わないため、見送ることとなった。非常に残念だ」と話した。衆院選後の同投票所の設置は、平成31年度までは継続される方針だ。（石川奏行）

筑波大学出版会
近刊案内

サービスサイエンスの事訳
データサイエンスと数理科学の融合に向けて
編著者　高木 英明　名誉教授

既刊『サービスサイエンスとはじめ』に続き、サービスの現場における人的資源に代わるデータと数理のサイエンスを、大学理工学系1年生程度の線形代数、統計、微積分で解説します。ブラックボックスとなっている最先端ソフトウェアも、仕組みを理解して使うことで、活用できます。

主な話題：データの類似度評価、異常検知、多次元尺度構成法、クラスター分析、ロジスティック回帰、Cox回帰、ウェブページのランキング、包絡分析法（DEA）、レベルニューマネジメント。

A5判並製、約352頁。9月30日発行。3900円＋税

広告欄

筑波大生と健康診断の今

筑波大学保健管理センターでは毎年、学生定期健康診断を実施している。自分の健康と向き合う良い機会だが、筑波大生の中には健康診断を受診しなかったり、受診後の同センターからの再検査の求めに応じない人がいる。平成23～27年度の5年間の学群生の健康診断の受診率や診断結果、未受診が招く病気の恐ろしさなどを取材した。（池田花於里、越智小夏、豊岡恵、山本颯＝比較文化学類、石川泰行、小宮山瑛生＝社会学類、明石尚之＝体育専門学群）

「最新の健康状態把握を」

■学年別受診率

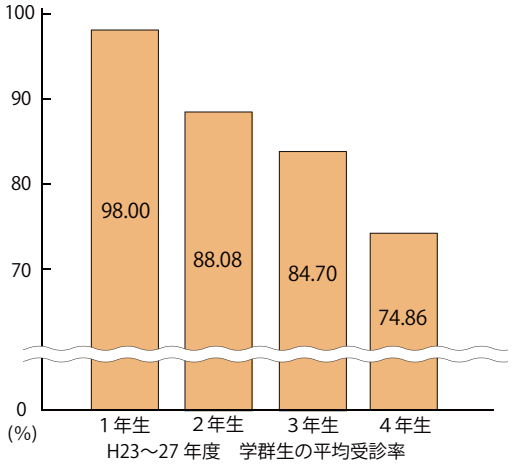
筑波大生の受診率は学年が上がるにつれて下がる傾向にある。同センターによると23～27年度の5年間で、1年生の受診率の平均は98・00％。これに対し2年生は88・08％、3年生は84・70％、4年生は74・86％と、1年生から4年生までの間で20ポイント以上受診率が下がってしまう。

これについて同センターの太刀川弘和所長（医学医療系・准教授）は健康診断の日時を把握しない上級生の存在に言及。「1年生の時はフレッシュマンセミナーなどで健康診断の日時などが通知されるが、上級生になると自分で日時を調べて受診しなければならない。中には、健康診断の存在を忘れてしまう上級生もいる」と語る。

一方学生の中には、「現在、健康診断の知らせは掲示板に掲示されるだけで見落としやすい」という意見もあり「同センターは今後、センター改革の一環として学生への周知方法についても検討する方針だ。

これに加え太刀川所長が注目するのが就職活動との関係だ。受診率は3年生から4年生で10ポイント近く低下するが、「4年生は就職活動と健康診断の時期が重なるため、忙しく受診しない人が多いのではないか」（太刀川所長）という。

太刀川所長は、就職活動では大学での健康診断結果が必要な場合があると指摘。学生の中には、就職活動で必要だからと数年前の結果をもらえないか、と問い合わせる学生もいるともいい、「健康状況は1年で変わる。常に最新の健康状態を把握できるように、毎年欠かさず健康診断を受けてほしい」と呼び掛けている。



H23～27年度　学群生の平均受診率

再検査 2割が応じず

■再検査に課題

健康診断の結果次第では、同センターから再検査を電話やメールで通知される場合がある。同センターでは学生の予定に合わせ受診が可能だが、通知を受けても、再検査を行わない学生が多いことも問題になっている。

同センターによると、平成27年度、内科の再検査の通知を受けた学生115人のうち、再受診しなかった学生は2割はいるという。尿検査の再検査を行わなかったある学生は「授業のある日だったこともあり、面倒くさいと思って再検査しなかった。体の不調は特に感じなかったので、問題はないだろうと思った」と話す。だが太刀川所長は「発見が遅くなると、重大な病気にかかる可能性が大きくなる。再検査に来て欲しい」と警告している。

その一方で、心電図の再検査を行ったある学生は「再検査をしないと、健康診断の結果が『異常』のままになると言われたので、渋々再検査を受けたが、異常なしと分かり安心した」と話す。

健康診断受診票の見本（9月25日、筑波大学新聞編集室で）＝石川泰行撮影

早期の病気発見も可能

■見つかる症状

さまざまな検査を通して病気の兆候などを発見できる健康診断。だからこそ受診を怠ると、場合によっては命に関わる病気に発展する。

同センターによると平成27年度、筑波大生の健康診断結果では尿検査で39人が、血圧検査で8人が再検査となり、これに加えそれぞれ4人、5人が再検査には至らないものの要観察となった。未受診の学生を含めるとこの数字は更に増えるとみられる。

これらの検査で分かるのは例えば、糖尿病や高血圧症だ。糖尿病は運動不足や肥満が原因で血糖値を下げるインスリンを分泌する膵臓の働きが悪くなり、血糖値が慢性的に高くなるもので、場合によっては失明や腎不全、脳卒中などの合併症を誘発する。また高血圧症は塩分の取り過ぎなどが原因で慢性的に血圧が高い病気で、動脈硬化の原因となり心筋梗塞などを誘発する。

これらは決して高齢者の病気ではない。日本大学病院小児科の医師らの論文によると、例えば生活習慣が原因となる2型糖尿病の発症率は近年、若年層でも高くなっているという。だが、これらの病気は健康診断での早期発見が可能なほか、投薬などを行わなくても生活習慣の改善だけで症状が緩和される場合もある。

診断で腫瘍見つかる例も

■手術した学生

健康診断では、手術が必要となるような重大な病気が発見される場合がある。昨年の健康診断で腫瘍が見つかり、摘出手術を受けた女子学生に話を聞いた。

健康診断から2カ月後。同センターから「X線検査で肺の周辺に影が見つかった」と再検査の通知を受けた。「今まで大病もなく、自覚症状もないのでびっくりした」と不安が募る中、再検査を受けると再び影が発見された。

その後、同センターの指示で筑波大附属病院でMRI（核磁気共鳴画像法）＝やCT（コンピュータ断層撮影）＝などの精密検査を行い、「縦隔神経原性腫瘍」と診断された。肋骨付近に腫瘍ができ、悪性の場合は肥大化して神経を圧迫。臓器に転移し、死に至る可能性がある病気だった。また将来、まぶたが開きにくくなったり、瞳孔縮小などの可能性もあったという。

医師からは「腫瘍は摘出しないと悪性か良性か分からない」と言われたが、夏休みに内視鏡手術＝で腫瘍の摘出を決断。手術は無事成功し、腫瘍は良性と判明した。約1週間の入院だった。

女子学生は、「来年生きているか分からないと実感し、やりたいことは今のうちにやっておきたいと思った。無事に手術が成功して自分より母親が安心しているのを見てよかったと思った」という。また、女子学生は「大学の健康診断は簡易な検査だと思い、いいイメージを持っていなかったが、受けてよかった。来年以降も継続的に受診したい」と話した。

同センターの太刀川所長によると、女子学生のような例は少なくなく、「心臓の不整脈などのように、命に関わる病気が見つかったこともある」と健康診断の重要性を語った。

MRI＝強力な磁石がつけられた機器の中に入り、磁気を利用して体の臓器や血管を撮影する検査。放射線を使用しないため被ばくの恐れがなく、脳や筋肉など水分が多い箇所の撮影に優れる。しかし、検査時間が比較的長く、磁気を利用しているためペースメーカーが埋め込まれている場合は利用できない。

CT＝X線を使い身体の断面を撮影する検査。検査時間が短く、胸部や腹部の病変の撮影に優れる。だが、使用するX線により被ばくしてしまう。

内視鏡手術＝腹部に5ミリ～2センチ程度の穴を開け、腹腔鏡と呼ばれる撮影器具と細い手術器具を挿入して行う手術。従来の手術に比べ、傷口が小さいため、術後の痛みが小さく傷跡が残りにくいことが特徴。しかし、モニターの映像を見ながらの作業となるので、医師には高度な技術が求められる。

定期健康診断の受付に並ぶ受診者の様子（2014年2月14日、大学会館で）＝保健管理センター提供

健康状態を見直す機会に

■記者の声

今回の取材を進めていく中で再確認したのは、健康診断の重要性だ。健康診断は体の状態を知れる絶好の機会であるだけでなく、その結果は、例えば高血圧の場合には塩分の取り過ぎ、また尿検査の異常の場合は運動不足や食べ過ぎなど、日常生活で改善すべき点を知ることもできる。私たちの人生に対する健康診断の貢献度は計り知れない。

当たり前のようだが、もし再検査や要観察などの診断が下された場合、すぐにそれに従うことも重要だ。今回の取材では、これらの診断に従わない筑波大生が驚くほど多いことが分かった。血圧や尿検査などで分かった異常は、放置すると命に関わる合併症を誘発することもある。取り返しのつかない事態になることを避けるべきなのは自明の理だ。

勉強。スポーツ。娯楽。何をするにしても身体は大切な資本だ。その資本を健全なまま保つために、日ごろからの健康意識を高め、ぜひ健康診断を受診したい。「健康の素晴らしさ、重要さを知ったのは病気になってからだった」。20代で重病を患った知人はいつもそう語る。知人は幸い病気を克服したが、病気になってから後悔したのでは遅過ぎるのだ。（石川泰行）

記者の声

動画製作者

過酷な労働環境 改善を
背景に放映本数の増加など

アニメの「動画」を描く人々について、日本での過酷な労働実態が問題化している。社会学の観点から労働問題などを研究する「日本労働社会学会」の昨年の論文によると、20代の1日の労働時間は約11時間である一方、年収は約106万円。日本は「クールジャパン」の一環として世界にアニメを売り出しているが、世界に誇れる文化にするためにも、動画製作者の労働環境の早急な改善を求めたい。

アニメは、初めに「座る」「立つ」のようなおおまかな動きを表現する「原画」を描き、それらの間にさらに細かい「座る→立つ」の動きをつけた「動画」と呼ばれる絵を組み合わせることで人物や風景の動きを表現する。

根っからのアニメ好きで、アニメの原画展示会に何度も赴いた。忘れられないのは今年5月に、東京都・池袋で見たものだ。冒険ものなど数作品の原画と動画が10数枚展示されていたが、いずれも登場人物の姿が丁寧に描かれており、髪や目などの細かい部分まで数多くの色が余すことなく使われていた。その美しさに感動するとともに、動画製作者らの情熱を感じた。

だがその後知ったのは、前述のような日本の動画製作者の過酷な労働環境だった。

まず労働強化についてみてみよう。NHK「クローズアップ現代＋」（6月放映）によると、その背景にあるのが、放映数の増加と動画製作者に求められる高品質だ。例えばテレビ深夜枠でのアニメ放映数は2010年の57本から15年には170本と大幅に増加。一方で、同番組によると細かな描写のアニメも増え、これが労働強化に拍車をかけているという。

次に低賃金だ。日本にはアニメ制作会社622社があるが、そのうち大手などで構成する日本動画協会（事務局・東京都千代田区）によると、アニメ業界の市場規模は02年の約1兆円が、昨年では約2兆円と拡大の一歩だ。ならばなぜ動画製作者の賃金が低いのだろうか。

同協会によると、低賃金の背景にあるのは、各アニメの製作費や利益が少ないうえに、動画製作者への利益還元率が低いことだ。テレビの深夜に放映される「深夜アニメ」の場合、製作費は1本約1000～2000万円。だが原画などの製作に支出されるのはこのうち1～2割で、それが動画製作者の低賃金を招いているという。また、低視聴率などで関連グッズの売り上げが低下した場合、この状況が更に悪化するともいう。

私見だが、問題解決のためには、まず動画製作者への利益還元の仕組みを作るべきだ。動画製作者の生活実態の調査を行ってきたある専門家によると、アニメ製作で利益はまず監督やシナリオライターに分配され、動画製作者は二の次にされている可能性があるという。またアニメの放映数も減らすべきだ。今年7月～9月だけで関東地方のテレビの放映数は1日7～8本と多く、これが動画製作者の過重労働の一因とも思う。

「労働時間が長く、アルバイトもできない。このため離職する人も多い」。今回取材した前述の専門家は業界の現状をこう話す。この状況が続けば日本のアニメ業界の衰退や崩壊は避けられない。日本が世界に誇る文化・アニメを動画製作者は底で支えてきた「彼らを守るべきだ」。

（前名裕一＝社会学類3年）

筑波時評

東アジア史

大陸観光客の台湾訪問 激減
中台関係の歴史振り返る

山本 真（やまもと しん） 准教授（中国近現代史）

一橋大学大学院博士後期課程中退、博士（社会学）。筑波大学歴人類学系講師などを経て2008年から現職。主著として、『近現代中国における社会と国家―福建省での革命、行政の制度化、戦時動員―』（創土社）など。

ここ数年、台湾海峡の福建省沿岸部に近い金門島や馬祖列島で歴史・民俗調査を行っています。金門島は厦門の、馬祖は福州のすぐ沖合の島で、1949年の国共内戦において国民党軍がここを死守しました。その結果、大軍が駐屯し続け、長きにわたり両岸対立の最前線に位置付けられることになりました。

1954年の第一次台湾海峡危機や1958年の第二次台湾海峡危機（金門砲戦）では、まさに激戦の舞台となった戦略的要衝です。

1980年代半ばまで台湾本島において戒厳令を施行し、軍事的支配を行ったことは広く知られています。

他方、最前線の金門島と馬祖列島では、「戦地政務」という軍事最優先の戦時体制が1990年代初頭まで継続されました。島の民間人は男女とも自衛団に参加させられるだけでなく、夜間の外出制限、ラジオの保有禁止（敵の宣伝を防止するため）などの不便な暮らしを強いられました。1958年の激しい砲戦では、島民に死傷者も多数出ています。

その一方で、島のインフラ開発が積極的に行われるとともに、軍人相手の商売（商店、食堂、軍服の洗濯・裁縫）により島民が経済的に潤ったという側面もあります。それゆえ、現地で聞き取りを行うと、当時の「戦地政務」に対する不満はあまり語られません。現在の政治に対する意識では、独立志向の強い民進党の勢力は両島では弱く、国民党の支持者が圧倒的多数であることが特徴です。

1990年代以降、台湾海峡両岸の緊張が弱まるにつれて、駐屯する軍人の数は顕著に減少してきました。以前は軍人との商売で潤っていた島民は、記念館・防空壕などの戦争遺跡を目玉として観光の発展に力を注いでいます。中国大陸から目と鼻の先という地理を活かして、大陸の観光客の誘致にも力を入れているとのことです。

ただし、昨年の選挙により民進党の蔡英文主席が総統に当選して以降は、両岸関係が緊張してきています。それにともない、大陸観光客の台湾本島訪問数も激減するなかで、馬祖島の観光も同様の趨勢にあると今年8月の調査で聞きました。

ところで、2017年9月に内閣改造を行った蔡英文政権は、独立志向の強い若手の賴清德台南市長を行政院長（首相）に抜擢しました。これにより中台関係が一層複雑化する可能性があるため、我々も政治情勢に注目していく必要があるでしょう。

内戦に敗れて台湾に撤退した蔣介石率いる国民党が、

反射鏡

筑波大生のアルバイト

生活費や娯楽費の多くを自分で稼ぐ学生にとって、アルバイトは欠かせない。新年度が始まり約半年が過ぎた今、新入生の中でもアルバイトを始めた人が増えていると思われる。筑波大学生はどのようなアルバイトをしているのか。中央図書館前、第三エリア前などで聞いた。（池田花於里＝比較文化学類1年、横山瑞樹＝社会学類1年）

【物理2年・男性】

以前に、短期でシステムキッチンを屋内に搬入するバイトをしていた。筋トレになればと始めたが、一時、物がつかめなくなるほどの筋肉痛になって大変だった。また、一緒に仕事をする人たちが一見怖そうに見えたが、いい人ばかりだったことがよかった。

【シス情1年・男性】

ホテルのフロントをやっている。1万円以上という高い日給が魅力的。接客を通じて言葉遣いなどを学んでいるが、時折、理不尽な立つこともある。

【比文3年・女性】

友だちから紹介され、大学近くの飲食店で働いている。ときどき、客がテーブルのナプキンやおしぼりで形を作って帰っていくことがあり、それを見ることが楽しい。

【人間総合2年・女性】

中国の天津出身で、たまに中国語スクールで会社員などに中国語を教えている。ビジネスの場での中国語の必要性が分からなかったが、最近は必要性を理解し始めている。

【社学2年・男性】

以前大学近くの大型スーパーで働いていた。客が使ったカートをまとめて運ぶ仕事などをしていたが、カートがバラバラに放置されている時には、いら立つこともあった。また、模擬試験の試験監督をしたこともある。朝7時～21時の14時間労働は辛かったが、給料は良かった。

【応理2年・男性】

つくば駅近くの居酒屋で働いている。夜中まで働くことは大変だが、まかないがおいしかったり、常連客に顔を覚えてもらえたりすることがうれしい。

【工シス3年・男性】

小学生や中学生にプログラミングを教える教室で働いている。始めたきっかけは、短期留学でプログラミングの面白さを知ったこと。得た知識を自分で使うだけでなく、子どもに教えることは純粋に楽しい。

【人文3年・女性】

自宅近くのケーキ屋で働いている。誕生日などのめでたいときにケーキを買いに来る客が多く、会話が弾んでいて楽しい。ただ、クリスマスに必ず出勤することになっており、大変だと感じることもある。

【人文4年・男性】

商業施設内で商品の売り込みをしている。いかに興味を持ってもらえるかがカギ。断られ続ける日も多いが、売れたときほども気持ちが良い。

【生資3年・男性】

つくば市内の菜園で、シート栽培という特殊な栽培方法に興味を持ち、トマト栽培の手伝いをしている。空きコマの2、3時間で働ける点が魅力。また、サッカーが好きなので、予定が合うときにプロサッカーチームのスタジアムで観客への対応やチケットもぎりのバイトをしている。

ブラック部活どう思う？

現在、中学校や高校で部活動が生徒・保護者・教員に過剰な負担を強いる「ブラック部活」が問題視されている。「ブラック部活」では、土日まで練習が詰め込まれ、生徒や教員が十分な休息をとることができないほか、指導にあたる教員に支払われる手当がほとんどなかったり、保護者による送迎中に事故に遭い生徒が死傷するなどの事例が相次いでいる。今後の部活動はどうあるべきなのか。中央図書館前や第三エリア付近で、筑波大学生に自身の経験も交えた考えを聞いた。

（前名裕一＝社会学類3年、横山瑞樹＝同1年）

【人文1年・男性】

高校時代は剣道部に所属していたが、顧問がとても厳しく練習中に平手打ちが飛ぶこともあった。だが、大阪の桜宮高校での体罰事件が世間をにぎわせた際に告発され、3週間ほどの謹慎処分が下された。それ以来体罰を受けることは無くなった。謹慎は効果がある。

部活動で理不尽だと感じることがあれば、遠慮なく告発して処分を求めるべき。

【比文1年・女性】

中学生のときに在籍していた吹奏楽部が、「ブラック部活」に近かったかもしれない。朝練や自主練などで勉強する時間も満足に確保することができず半分ほど休部していった。高校で入部した演劇部の自由な雰囲気の方が理想的であるように感じる。過剰な束縛は進路設計に影響することはもっと認識されるべきだと思う。

イラスト＝長手彩夏（地球学類4年）

【人文3年・女性】

中学時代に在籍していた吹奏楽部は、顧問は新任だったが、部の雰囲気は上下関係にやたら厳しかった。「ブラック」な部活とは必ずしも顧問によって生み出されるのではなく、「伝統」名のもとで先輩から強制される場合も多いのだろう。そういったものからの脱却も必要だと思う。

【知識図書1年・女性】

部活動の顧問の数を増やし、教員一人ひとりの負担を減らすことが必要なのではないか。

【比文1年・女性】

高校時代、部活動の休みが不定期でかなり大変だった。必ず週に一回は休みを設けるなど、練習と休息のメリハリをつけるべきだと思う。

【教科1年・男性】

安易に外部の人間に指導をまかせるのではなく、給料を上げて教員のやる気を出させることが重要ではないか。

【スクール1年・男性】

教員の部活動に関する手当がほとんど出ないと聞いたことがあるが、部活動の指導も教員の仕事であるはずなのにおかしいと思う。

ダンスの世界に引き込む
個性豊かな21作品を披露

ストリートダンスサークル「Realjam」が主催するダンスイベント「Mel Night（メルナイト）vol.39」が、8月5日にclub GOLD（土浦市）で行われた。会場には約70人が来場し、迫力あるダンスで観客を魅了した。

ストリートダンスは路上で踊ることから生まれたダンスの総称で、ヒップホップやロックなどさまざまなジャンルがある。同サークルには7つのジャンルがあり、それぞれの個性を生かした21作品を披露した。

イベントは新入生が初めてダンスを披露する「1年ユニゾン」で幕を開けた。総勢42名の新入生たちが7つのジャンルを踊り分け、会場を大いに盛り上げた。参加した見持真由さん（社学1年）は「初めてのイベントでとても緊張したが、温かい声援が励みになった」と振り返った。

3人という少人数のグループながら圧倒的な存在感を放ったのは「あまくぼ」。ジャンルは筋肉を弾くことでリズムを表現するポップだ。序盤のシリアスな曲調に合わせた振り付けや雰囲気で、観客を独特の世界観に引き込んだ。作品の後半にはアップテンポな曲に切り替わり、時折笑顔を見せながら圧倒的な技術を生かしたパフォーマンスを行った。

代表の村上隼汰さん（障害3年）は「舞台に立つ仲間たちの気合いや緊張が伝わってきたステージだった。一人ひとりが気持ちのこもったダンスをしていて胸が熱くなった」と語った。（橋野朝奈＝日本語・日本文化学類3年）

作品を披露する「あまくぼ」（8月5日、club GOLDで）＝Realjam提供

筑波大で芸術体験
子どもら約700人集う

子どもたちが芸術に触れるイベント「夏休みアート・デイキャンプ&アートたんけん隊2017」が、7月22、23日に筑波大学の体育・芸術エリアで行われ、子どもや保護者らが700人が参加した。両イベントは、巨大な石こう像のデッサンや工房の見学など、芸術専門学群のある筑波大ならではの芸術体験をしてもらうことを目的に、筑波大の教員と学生が運営。今年で10回目となる。

■アート・デイキャンプ

5C棟の大石こう室などに果物や鳥の剥製が用意され、2日間で延べ400名を超える子どもたちが木炭や水彩絵の具など好きな画材を使って自由にデッサンを楽しんだ。また、芸術専門学群の学生らが参加者に木炭を使った陰影の作り方などを教えた。

参加した小学6年生の女子は、「学校以外の場所で絵を描くのは新鮮で楽しい」と話していた。

主催者の太田圭教授（芸術系）は、「成績がつく学校の授業とは違い、この企画は楽しい思い出を作ることも目標。芸術家になりたいという気持ちが生まれる場になればうれしい」と話していた。

■アートたんけん隊

学生による木彫や石彫の作品が並ぶ芸術学系工房棟などを見学するツアーが行われた。参加者は気に入った作品を用意されたインスタントカメラで撮影し、お気に入りの一枚に題名をつけて台紙に貼り、色ペンなどで自由に飾り付けをして持ち帰った。

学内の作品を撮影した写真に飾り付けをする子どもたち（7月22日、6A棟で）

初めて参加したという小学4年生の女子は、「初めてインスタントカメラを使ったので、すごく楽しかった。また参加したい」と話した。

主催者の石﨑和宏教授（芸術系）は、「インスタントカメラを使うなどの学生ならではの発想で、子どもたちの関心を高める内容になったと思う」と話した。（池田花於里＝比較文化学類1年、写真も）

絶対音感

M.A

豊かな「夏」演奏に込めて

人は夏をどう思うだろうか。一年の中で最も生命にあふれる季節という人もいれば、秋、冬を予兆させる寂しさを感じる人もいるかもしれない。そんなさまざまな思いがこもった「夏」を、今年8月21、22日のサマフェス」で聴いた。第一エリアの文化系サークル会館（文芸館）で出会ったのは筑波大学生4人組の「The Baskin Robbins」。「go!go!vanilla」のコピーバンドで、同バンドの代表曲の「エマ」など4曲を披露した。

ドラムの上森香穂さん（知識図書3年）の掛け声で「エマ」が始まった瞬間、観客席の歓声がひと際大きくなる。コピー元のバンド特有のアップテンポで踊り跳ねるようなビートを「The Baskin Robbins」は余すことなく披露した。サビは観客の歌声も巻き込み、勢いを加速させていく。

「エマ」という曲名は英語の「Emergency」（警告）に由来しているという。サビのフレーズの「危機的興味本位を／刺激的ニューウェイヴを／見たい方に理想と本当の／答えはあると思うよ」には、周りに流されずに自分の好きなものを自分自身で判断しようというメッセージが込められている。ポップな曲調に潜む熱い想いを、ボーカルの佐々木勇星さん（工シス3年）が力強く歌い切った。

3曲目は、アグレッシブな演奏から一転し、ゆったりとしたメロディーの「なつのうた」を披露。鈴木敬文さん（化学3年）の静かなギターからドラム、ベース、サブギターと音の厚みが増していき、樹木が生い茂り、あたりが鬱蒼としてくる盛夏を感じ始める。

夏とは物悲しいものだ。人々は、次に寂しい秋が来ることを知っているからこそ、その狂えるものを悲しく思う。

演奏は、「どろどろのバニラアイスクリーム」「向日葵畑広がる」といった夏の風物詩を、どこか切なげなメロディーに乗せる。熱気がこもっているはずの会場に、涼しい秋の風を感じさせるような佐々木さんの爽やかな歌声が響いた。

演奏の最後は再びアップテンポの曲「ヒンキーディンキーパーティークルー」で、会場の熱気は最高潮に。「テンポが特に速く、弦の移動も激しいため苦労した」（ギターの鈴木さん）が、アップテンポな曲調を支えるドラムの上森さんのダイナミックな演奏は、小柄な彼女を一回りも二回りも大きく見せた。序盤のシャウトや曲の随所にあるコーラスそれに加え、佐々木さんの跳ぶことを促す合図や「一緒に！」という掛け声。観客はラインパフォーマンスに誘き込まれていった。

「ヒンキーディンキー」は「一流」や「最高！」という意味。題名を体現する疾走感溢れる夏らしい一曲に、観客席では密集してジャンプやぶつかり合いをおこして楽しむ「モッシュ」が巻き起こった。バンドも観客も一体となり、最後の夏の熱を一気に吐き出した。

佐々木さんは「バンドメンバーだけでなく、観客と一緒に音楽を作り上げていけることが楽しい」とライブの魅力を語る。バンドと観客が揃って初めて生まれる音楽に、その日巡り合った。（佐々木悠里＝人文学類3年、写真も）

疾走感溢れる演奏で会場を盛り上げるメンバー（8月21日、文化系サークル会館で）

原点 GEN-TEN

「正しそう」と思える感性を

スポーツの研究に従事する原点、それは自分の不具合のある体と向き合ってのことでした。生まれつき股関節脱臼だった私は装具をつけて歩き始め、現在でも股関節の違和感を持ちながら生活しています。

3歳で装具を外したものの、少年野球に打ち込んでいた小学校5年生の時に突然、股関節の脱力感を覚え、プロ野球選手になるという当時の夢を諦めることも考えました。中学でも突如起きる股関節の脱力感から、他人に迷惑をかける団体競技は諦めました。

高校で陸上競技を始めましたが、思い切りできないジレンマから本気で取り組めませんでした。ですが高校を卒業して15年、リハビリやトレーニングを通じて自分の体と向き合い、他人との違いを知り自己の最高のパフォーマンスを求めて競技を続けた末、110㍍ハードルで2度の日本記録樹立と2度の五輪出場に至りました。

股関節の脱力感はどの医師にも原因不明だと言われ続け、不安を持ちながら治療に取り組むと同時に、パフォーマンスが高まるほどトレーニング科学と理論の違いを感じました。しかし、矛盾を感じながらも「正しそう」だと思うものに打ち込み、トレーニングとコンディショニングメニューを自分で作り競技に取り組んでいました。

個人的に「正しそう」と思うかどうかは、本人にとっての単純さや美しさが大きなウェートを占めます。今考えると初めの数年は、コーチや科学から「正しい」を知れば知るほど自分をバラバラにして考えることしかできなくなっていました。

一方、競技を実践することで「正しそう」という感性でそれらを統合できるのではないかとも考え始めたことで、競技人生後半は欠点ばかりを見ずに前向きに競技に取り組めたと思います。

結果を残す選手のその時々のトレーニングは科学的ではないように見えますが、長期的視点に立つと理論的なものになります。大学生やプロ選手に指導する際、彼らが遺伝的要因だけでなく環境的要因である経験値や認知に大きく影響されていると感じます。

したがって、初めはトレーニングを選択させますが、選手の経験や環境が影響してそのうち選手自身が選択するので、何を「正しそう」と感じられるかを時間をかけて教えることが大切です。

現場では、選手が解決できないと思うほどの大きな矛盾と失敗を少し考慮し直すことで見事に解決し、それまでバラバラだったものを統合できることがあります。こうした作業を選手自身が行えるように試行錯誤しながらスポーツに打ち込む素晴らしさを学ぶほど「正しそう」と思える感性を育むことが必要です。

多くの選手にスポーツの素晴らしさを経験してほしいと思いながら研究とコーチングに打ち込む原点は、自分の体の不具合と向き合い、試行錯誤してパフォーマンスを求め続けた選手時代の自分にあります。

谷川 聡 准教授（スポーツ科学）

体育系・准教授。筑波大学大学院人間総合科学研究科博士後期課程修了（博士）。ミズノトラッククラブに所属し、陸上競技110㍍ハードルでシドニー・アテネ五輪出場、現日本記録保持者。2005年に筑波大学に赴任し、12年より現職。筑波大学体育会陸上競技部監督、短距離・障害コーチ。

ぶらり俳句 筑波大

「休暇果つ」

・LINEグループ夏みじかしと云ひあへる
・サンダルや夕暮となり一人となり
・休暇果てるサンダルのひんやりと

第三エリア前で田中開撮影

大学の夏休みの長さを一番実感するのは、秋学期になってから、友達同士で夏の思い出を交流しあう時ではないだろうか。海水浴、合宿、花火などのイベントも、思い出して楽しむには、冷え込んだ十月ではちょっと遅い。夏休み明けのことを俳句では「休暇果つ」というが、初秋の時期を指す言葉。大学生の「休暇果つ」には独特の感慨がある。（堀下翔＝比較文化学類4年）

電子ジャーナルの価格高騰

大学の経費削減の影響で予算不足に悩む筑波大学附属図書館は、資料購入費の調達を目的に今年1月～3月、初のクラウドファンディング＝Q1＝を行った。その結果、約512万円が集まり、図書などの購入費に充てられている。このような予算不足に拍車をかけているのが、学術雑誌の電子版（電子ジャーナル＝Q2＝）の価格の高騰だ。筑波大をはじめ、多くの大学図書館がその価格高騰に苦しむ電子ジャーナルについて取材した。（木村誠、佐々木悠里、鈴木瑞穂＝人文学類、井手真琴＝国際総合学類、吉永真理＝生物学類、佐藤巧基＝物理学類）

値上げ続ける学術雑誌

概要

電子ジャーナルは1990年代に米国で誕生し、ネットの普及で広く浸透した。キーワード検索や動画の視聴が可能なうえ、紙媒体より最新の情報が得られるため、研究者にとって不可欠な存在だ。

筑波大附属図書館によると、同図書館では2000年ごろから電子ジャーナルの購入を始めたが、費用は徐々に増加。07年を境に紙媒体の資料費を上回った。昨年度では同図書館の資料費約6億4000万円のうち、電子ジャーナル（約3万媒体）の費用は約4億5千万円と、全体の7割弱に。この結果、例えば15年の場合、雑誌や新聞など、紙媒体の購入数は約1万冊と1999年の約半数に削減され、新しい図書の購入数が減少する事態もでてきた。

これに加え問題なのが、毎年約5%上昇する学術雑誌の価格高騰だ。これは①他の雑誌では代替できないため価格競争が起きない②大手出版社が市場をほぼ独占している……などが原因。また投稿される論文数の増加で論文の査読や管理、編集など出版社の負担が増え、高騰に拍車をかけている。

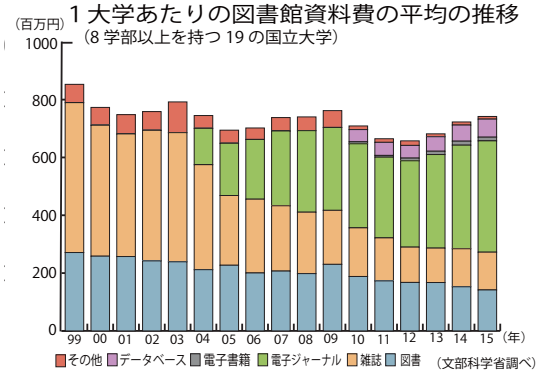
不足する紙媒体の購入費

このような中、2001年ごろ、電子ジャーナルの「パッケージ」契約が結ばれた。従来の契約金額に追加料金を支払うことで、パッケージに含まれる全ての媒体を閲覧できる制度。媒体をそれぞれ購入するよりも料金も毎年上昇している。また、筑波大ではパッケージ契約で購入した電子ジャーナルのうち約75%がほとんど利用されていないという。しかし、契約上、パッケージ内で利用されない媒体だけの解約はできず、一つのパッケージを中止しようとすると今度は必要な媒体も購読できないという問題もある。

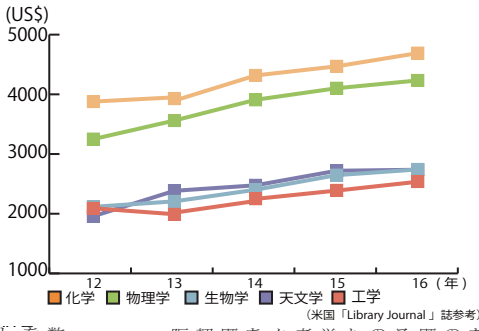
同図書館の職員は「電子ジャーナルの価格は年値上がりし、大学の予算はいずれ限界を迎える。今は出版社との交渉で可能な限り値上がりを抑えるよう努力している」と話す。

Q1＝クラウドファンディング＝インターネットを通じて一般の人などから出資を募る活動。起業家などの資金調達の手段として注目を集めている。

Q2＝電子ジャーナル＝コンピューターを利用し閲覧する電子化された雑誌。特に学術系の論文誌を指す。



（文部科学省調べ）



（米国「Library Journal」誌参考）

研究者の意識変革から

JUSTICE

全国の大学で構成し出版社との価格交渉などを行う「大学図書館コンソーシアム連合（JUSTICE）」運営委員会の細川聖二さん（東京大学附属図書館情報管理課長）によると、電子ジャーナルの価格高騰は世界の大学でも問題となっており、欧州では、オンライン上で学術雑誌を誰もが無料で閲覧できるようにする「オープンアクセス（OA）運動」が盛んだという。

これには論文を発表・出版する際、研究者や研究者を支援する助成機関が費用を出版社に払うことで無料公開する方法と、出版後に研究者が機関リポジトリ＝Q3＝などで公開する方法がある。

欧州では主に前者の方法が採られており、助成機関の補助を受けながら、論文を発表する側が費用を払うことで、いずれは全ての論文を無料で利用できることを目標としているという。

一方、日本の場合、助成機関の支援が少なく、欧州のような運動は行われていない。日本でのOA運動は出版後にリポジトリなどで公開する方法が主だが、手間がかかるため協力的な研究者は多くはない。

細川さんは「研究者の意識を変えることが必要だ」と話した。

Q3＝機関リポジトリ＝ある研究機関の研究成果を電子化し、保存・公開を行う情報管理システムのこと。筑波大の場合は「つくばリポジトリ（Tulips－R）」がある。

文部科学省

文部科学省研究振興局の玉井英司参事官補佐は、一連の問題について「国が各大学の多様な需要を一律に調整することは現実的ではなく難しい。各大学が自身の特長を生かして決めた購読契約の方向性を尊重するとともに、オープンアクセス（OA）を推進する団体の支援を行っていきたい」と話す。

取材に応じる玉井英司参事官補佐（8 月 28 日、文部科学省で）＝井手真琴撮影

各大学に合わせて支援行う

同省は、論文を無料公開する2つの取り組みを支援。一つは2003年に始まった「国際学術情報流通基盤整備事業」によるもので、国際的なOA活動と連携し、国内の学術情報を積極的に海外へ発信する取り組みだ。

もう一つは「科学技術振興機構」の「J－STAGE」で、国内の学会が発行する論文誌を電子化し、無料で提供する場の整備を行っている。

玉井参事官補佐は問題の根本解決には研究者一人ひとりの意識改革が必要、と指摘。「研究成果の発信・共有の場を商業出版社に依存しているという現在の構造にも問題がある。一部の出版社によるジャーナルの寡占化が進む限り、問題は解決しない。解決への『特効薬』はないが、引き続き価格高騰への対応策を検討していきたい」と話した。

各大学

一橋大

一橋大では、国立大学で数少ない社会学部や商学部を持つ社会科学系の大学として、文系の電子ジャーナルを中心に購読しているが、理系のものと同様、文系の電子ジャーナルも価格を悩まされているが、全国の大学は電子ジャーナル問題にどのように対応しているのだろうか。社会科学系の国立大学として日本で最も長い歴史をもつ一橋大学、日本で初めて所属研究者の研究成果をオープンアクセス（OA）にすることを原則化した京都大学、問題の対策としてパッケージ契約の取りやめを行った大阪大学を取材した。

社会科学に特化している一橋大学の図書館（9 月 16 日、一橋大学で）＝一橋新聞提供

「日本の研究に深刻な影響」

筑波大附属図書館は電子ジャーナルの価格高騰に頭を悩ませている。同大学附属図書館によると「パッケージ契約は多くないが、個別契約の雑誌の価格が年々上昇し、（図書・データベースなどの）必要な資料に回す費用が不足する事態が起きている」と話した。

ここ数年は利用統計をもとにアンケート調査を実施し、購読タイトルの削減やパッケージ契約の見直しを検討している。

また、既存のパッケージ契約については、パッケージ契約と個別に論文を購入した場合の費用を比べ、購入の是非を検討している。

同大附属図書館は（電子ジャーナルの価格高騰は）日本の教育・研究力に深刻な影響を及ぼしている。大学の規模に関係なく教育・研究環境が等しく整備されることを期待している」と話した。

京都大

2015年に総合大学としては全国で初の取り組みとなる「京都大学オープンアクセス方針」を採択。同大の常勤教員が発表した学術論文は「KURENAI」と呼ばれる同大学術情報リポジトリでネット上に無料公開し、OA化することを原則とした。現在、KURENAIでは、学術雑誌に掲載された論文約1万5000件がOA化されている。

論文を無料で公開

これにより、同大学内外で誰でも閲覧できる論文が増えるうえ、広範な検索も可能になった。今後は論文だけでなく、実験などの研究データのOA化も検討しているという。

同大附属図書館の担当者は「リポジトリでのみ発表するOA化された論文が増えれば、購読していないジャーナルの掲載論文へのアクセスが容易になるが、それが電子ジャーナルの購読方法にまで影響を及ぼすには、まだ相当の時間がかかる」と話した。同大では、現時点で出版社との電子ジャーナルの契約の中止、変更などは行っていない。

大阪大

大阪大では、2014年までオランダのアムステルダムを拠点とする世界最大規模の学術雑誌出版社「エルゼビア社」と電子ジャーナルのパッケージ契約を結んでいた。だが毎年の値上げで同契約が予算的に困難になったという。

15年より同社との同契約をやめ、需要の多い電子ジャーナルを個別に購入する契約方式に移行した。その際、購入する電子ジャーナルの希望調査を全教員を対象に行ったが、希望のあったものを全て購入することは予算的にできなかったという。

同大附属図書館の担当者によると、「全体的に価格が高騰している状況だが、可能な限り教員の希望をかなえられるよう努力している」という。

図書館の苦悩

出版社

学術雑誌の中でも特に評価の高いものの一つに、広い分野の論文を扱う科学誌「Nature」がある。1869年創刊の週刊誌で、発行数は約5万部。DNAの二重らせん構造の発見などノーベル賞クラスの論文を多数掲載してきた。

現在「Nature」を出版している学術出版社、シュプリンガー・ネイチャーによると電子ジャーナルの価格高騰は、「アジアを中心とした世界的な論文投稿数の増加とその審査の負担が増加したことに加え、論文をより早く発表するためのシステムの開発などが要因」だという。また同社は大学図書館の財政難については「パッケージ契約や個別契約などいくつかの選択肢を提供し、各図書館と相談しながら最適な提案ができるよう尽力している」と話す。

シュプリンガー・ネイチャーはシュプリンガーやネイチャーなどの出版プランドを含む複数事業の合併で2015年に誕生。合併以前のシュプリンガーグループは1996年に電子ジャーナルの提供を始め、2007年には電子書籍の販売を開始している。

電子ジャーナルの主な出版社

出版社	各出版社の特色
シュプリンガー・ネイチャー（Springer Nature）	ドイツを拠点とする出版社。自然科学誌「Nature」などを発行。論文雑誌のデータベースサービス、SpringerLink では特に科学、技術、医学分野の論文雑誌を閲覧できる。
エルゼビア（Elsevier）	オランダを拠点とする出版社。医学誌「The Lancet」や生物学を扱う学術雑誌「Cell」などを発行。大学など教育研究機関向けの Scopus や、文献データベースの ScienceDirect などの有料サービスを提供。
ワイリー・ブラックウェル（Wiley-Blackwell）	アメリカを拠点とする出版社。2007 年にワイリー社とブラックウェル社が合併して誕生した。主に材料科学を扱う科学誌「Advanced Materials」などを発行。

その他出版社 ・Cambridge University Press ・Oxford University Press など

識者の声

小泉公乃助教

図書館への投資は必要

学術雑誌の価格高騰について、各国の現状や筑波大が取るべき対策などを小泉公乃助教（図情メ系）に取材した。

――各国の状況はどうですか。

欧米諸国は日本に比べ研究予算が潤沢で、日本ほど学術雑誌の価格の高騰の影響は深刻ではない。しかし発展途上国は予算不足のため日本よりも更に深刻な状態だ。

――筑波大が行うべき対策は。

クラウドファンディングという一度限りの対策に資料費を依存せざるを得ない附属図書館の状況に強い危機感を持つ。図書館職員にそのような努力をさせない環境整備が大学には必要ではないか。学術雑誌は研究活動の基盤なのだから、他の経費を削っても、戦略的に投資していく必要がある。

――学術雑誌の価格高騰の根本的な解決策は。

問題の根本的解決には学術誌の出版業界の事業構造の変革が求められるため、長い時間がかかる。既存の学術誌以外の方法で論文を世界へ発表する場を作ることが重要だ。具体的には大学図書館の機関リポジトリや、オンラインで無料公開している学術雑誌が挙げられる。そのためには、研究者がオンラインで論文を無料公開するオープンアクセス（OA）などについて、もっと詳しく知る必要がある。

視点

筑波大附属図書館の財政難は深刻で、昨年から今年にかけて200以上の雑誌や新聞の購読が中止された。運営費交付金の減少が主な要因だと思われがちだが、それとともに深刻な原因が、学術雑誌やその電子版（電子ジャーナル）の値上げだ。

学術雑誌の値上げには理由がある。世界中で論文の発表数は増え続け、それに伴い審査などで出版社の負担も増大の一途だからだ。だが、今回の取材で筑波大の図書館職員が話したように、このまま電子版を購入し続けると「大学の予算は限界を迎える」のだ。

ここで考えるのが、論文をネット上で無料公開する「オープンアクセス（OA）方式」だ。日本でも近年OA化の動きは盛んだが、図書館の負担を減らす意味でも、論文の成果を共有する意味でも、同方式をより推進すべきだ。OAは研究者や学会により推進されるが、取材を通して、OAの重要性に対する意識が研究者や学会に足りないのではないかと感じた。筑波大のある文系教員は「学会は論文を読み手にいち早く届けるために身銭を切る人の集まりであるべきだ」と話す。

重要な研究成果は、特に大学などの教育機関では平等に公開されるべきで、図書館の予算の差で各大学の学術情報量に格差があってはならない。図書館と出版社のみならず、研究者や学会などが協力してこの問題に取り組むことを期待する。

（吉永真理）

矢澤真人教授

作文を支援する辞書作る
辞書界の不況の突破口に

日本書籍出版協会によると、2008年の紙の辞書の売り上げは約250億円と、10年間で50億円減少した。また、電気製品の大手企業などで構成する「ビジネス機械・情報システム産業協会」（東京都港区）によると、電子辞書の売り上げも、ピーク時の2007年の483億円が、2013年には半分に減少している。この背景にはスマートフォンの普及がある。無償で気軽に単語の意味が調べられるようになったため、辞書を持ち歩く必要性が低くなっているのだ。

辞書が苦境に立つ中で、辞書の活用を広げようと、新時代の辞書開発に取り組むのが、言語学者の矢澤真人教授（人社系）らの研究チームだ。

これまで辞書は、紙から電子版への媒体の変化はあっても、内容や体裁が変化することはほとんどなかった。そこで矢澤教授らは、何が利用者に必要なのかを再考。利用者一人ひとりの言語能力と使用用途に合わせた辞書が必要だと判断し、言葉の意味を調べる際に用いる従来型の辞書とは異なる、文章を書く際の利用を想定した「子ども向け作文支援型辞書」の実用化を考えた。

矢澤教授らの辞書は作文を書く際の主語と述語の不一致などの基本的な文法事項を間違えやすい小学生を対象にしており、これまでの辞書の概念を覆す試みとして、言語学者だけでなく出版社などからも大きな注目を集めている。

子どもが「書く」場面に使える辞書の作成に当たり、まず教授らは「読む」際と「書く」際に必要な情報の違いに着目した。既存の辞書には、言葉の解釈（語釈）以外の情報が少ない。そこで矢澤教授らは「書く」際に必要となる文型や、共起語と呼ばれるある単語と連動して出てくる単語を語釈に追加して記載。また、文型に合わせ例文を増やしたり、言い換え可能な例文を記載したりと、「書く」ために必要な情報量を増やしている。

例えば、同じ「夢」という単語でも、「将来の夢」と「睡眠時に見る夢」では単語の意味が異なる。「睡眠時に見る夢」では、「僕が昨日見た夢は空を飛ぶ夢です」というように「夢」を重ねて使用することができるが、「将来の夢」の場合はそれができない。そのため、「将来の夢はサッカー選手になる夢です」といったような文法上の間違いが起こりやすい。

そのような時にこの辞書を用いれば、単語の意味ごとに正しい文法の例文が書いてあるため、正しい文章を書くことが可能になる。

また矢澤教授らはデータベース化された大規模な言語資料を使用し、一般的な国語辞典の語釈で使われる語が、小中学校などの教科書で使われている頻度を分析。すると、一般向けの辞書の語釈で使われる語が使われない場合も多く、中学生以下の子どもにとって、一般向けの辞書の語釈は難しいことも分かった。そこで矢澤教授らの辞書は、小学校の教科書で用いられている表現を多用している。

これらの技術を用いた「子ども向け作文支援型辞書」は、数年以内に実用化し販売を行う予定。さらに、今回の研究の技術を応用して、対象を大人や外国語話者に絞ったものなど、多様な辞書を開発する予定だ。

矢澤教授は、「辞書が生き残るには、お金を払ってでも買いたいと思わせる付加価値が必要。そのためには、従来の辞書の概念を覆さなければならない」と話す。

利用者一人ひとりの言語能力と用途に合わせた次世代の全く新しい辞書が、私たちの言語活動をより豊かにしてくれる日も、そう遠くはない。（越智小夏＝比較文化学類2年）

手紙

クリスピー・クリーム・ドーナツ・ジャパン 社長
若月 貴子 さん

未来は目の前のことから

「将来のキャリアプランを教えてもらえますか？」

就活生のみなさんは、採用面接でこの問いに何度か出くわしたのではないでしょうか？社会人になったばかりの25年前の私に同じ問いをしても、「分かりません」としか回答できないでしょう。

当時の私は自分の将来に向き合う覚悟もなく、なんとなく就職してしまったのが正直なところです。その当時は「企業の社長」を任されるとは夢にも思わなかった私が、これまでを振り返って、みなさんにアドバイスできるとしたら以下の3つでしょうか。

まず、「不明確な将来を悩むぐらいなら目の前のことをやる！」と。「Wil、Can、Mustの輪」というのがありますが、まさにそれです。キャリアプラン（Will）が見えないなら、まずは目の前のこと（Must）に真剣に取り組むことで「Can」が増べ、「Will」が見えてきます。

そして、「できるだけ早い時期に『試合』に出る」こと。自分が前面に出て勝負する場を、できるだけ若いうちにたくさん経験すること。大企業では難しいかもしれませんが、それでも「Can」が多ければ必ずチャンスはめぐってきます。いかにポテンシャルが高く地頭が良い人材でも、練習ばかりで「試合」に出なければ成長しません。

最後に、「社内外を問わず、さまざまな職業・年齢の人との輪を作る」こと。慣れた環境で仕事をするのは楽で、長く時間を過ごせば居心地がよくなり、今いる場所が一番だと思えてきます。でも、自分の知らない世界には今とは違うチャレンジやワクワクが待っていることがあります。外の世界の人たちとの関わりを持つことで、新しい世界の扉が開きます。

自分自身でいうと、新卒で入社した会社の最初の数年はひたすら「Must」でした。やりたいことがなかったから、というのが正直な理由ですが、与えられたことは期待値以上の結果を出すよう心がけていました。「Can」が増えてきた20代後半に香港でのジョイントベンチャー解消交渉を任されるチャンスに恵まれ、以降、さまざまなプロジェクトに携わることになりました。転職という選択肢を選んだのは、携わった仕事を通して自分のキャリア形成に向き合った結果です。

社会人って厳しそうにみえますが、案外、楽です。自分でいくらでも逃げ道がつくれるから。「何もしない」ことも選択肢になる。目の前にあるたくさんの選択肢の中で自らが下した決断の積み重ねがキャリアという足跡になるのだと思います。

これからやってくる選択も経験も、無駄なことはひとつもありません。自分で選択したことではない、上司のパワハラや仕事の失敗、なんでこんなことやるのかなと一見思えることなども、後になってなんらかの形で必ず役に立ちます。でも、苦しいばかりはよくないです。楽しいことは大事です。その「楽しい」も、実は自分でつくるしかないのです。

人生100年といわれる昨今、大学生のみなさんにはあと80年！。退屈な時間になるか、充実した時間になるか、自分らしい選択を！

（平成3年度人間学類卒）

筑波大学新聞
広告掲載募集中
広告の掲載を希望する企業・団体などを募集しています。募集要項や申請書に関しては以下の URL からご確認ください。
http://www.tsukuba.ac.jp/public/newspaper/shinbunindex.html
お問い合わせ
TEL:029(853)2040・6699
E-mail:shinbun@un.tsukuba.ac.jp

瀬立 大差で優勝

日本選手権

カヌー

カヤックシングルで序盤から快調に後続を突き放す瀬立（9月11日、木場潟カヌー競技場で）

【木場潟カヌー競技場（石川県小松市）で秋田耕平＝社会学類2年、写真も】日本選手権が9月7―11日に行われ、パラカヌーの女子カヤックシングル200㍍（運動機能障害）で瀬立モニカ（体専2年）が1分3秒342で優勝した。また、男子カナディアンでは八角周平（同1年）が社会人の大城海輝（四日市カヌークラブ）と組んだペア1000㍍で準優勝を果たしたほか、シングル500㍍では7位に入った。

パラカヌーのカヤックシングル決勝は2本行われ、その合計タイムを競う。瀬立は1本目、スタートの加速に成功すると後続を突き放し、男女混合のレースながら後続に40㍍の差をつけて1着になった。2本目も序盤は快調に進めたが、向かい風が強まり1本目より記録は伸びなかった。だがこのレースも1着に入り、総合で優勝を決めた。

瀬立は「世界選手権（チェコ）後の最初の大会で調整が難しかったが、記録的にはまずまずの結果。11月のアジア大会に向け練習を重ねたい」と語った。

八角はカナディアンペア1000㍍で大城とペアを組むのは初。だが、息の合ったパドルさばきで先頭集団に食い込み、3分45秒707で準優勝した。一方カナディアンシングル500㍍決勝では、苦手なスタートで出遅れ、得意の後半で追い上げを見せたが及ばず7位に終わった。また八角はカナディアンシングル1000㍍にも出場したが、準決勝で4着となり、全体では11位に終わった。

八角は「ペアでは組んだ大城と相性が良く、思いのほか上位に食い込めた。ただシングルはいずれもレベルが高く、実力の差を感じた。世界で戦うためには、まずこの壁を崩さなければならないので練習に励みたい」と語った。

今後、瀬立は11月にタイで行われるアジア大会に、八角は10月に愛媛県で行われる国民体育大会（国体）にそれぞれ出場する。

大西が学生の頂点

全日本学生選手権

剣道

学生日本一を決める全日本学生選手権が7月22、23日にエディオンアリーナ大阪（大阪市浪速区）で行われ、女子は大西ななみ（体専4年）が優勝、男子では星子啓太（同1年）がベスト4に入った。

大西は準決勝までのほとんどの試合をメンの一本勝ちで順調に勝ち上がった。22日の決勝戦では松本智香（鹿屋体育大）と対戦。高身長を生かしたメンが得意な相手に対し、大西は下からの小技で相手の打ち終わりの隙を狙う作戦を立てたが、勝負は決まらず延長にもつれ込んだ。延長戦でも両者互角の戦いを見せたが、大西は相手のわずかな隙を見逃さずにメンを打ち込み、優勝を決めた。

大西は「相手の隙が見えた瞬間、気付いたら体が動いていた。優勝できたのは初めてでうれしい。11月の全日本女子学生剣道優勝大会（全日本）の団体戦でも勝利に貢献したい」と話した。

星子は23日の準決勝で平野青地（専修大）と対戦。技を繰り出す間合いが広くなる上段の構えをとる平野に対し、星子は一歩も引かず、積極的に技を繰り出した。攻め合いの中、星子が手元を上げた隙に引き小手を決められた。その後星子は取り返そうと猛攻したが、一本は遠かった。

星子は「大学生はレベルが高いと痛感した。この経験をばねに次の全日本に挑みたい」と語った。（山本颯＝比較文化学類2年）

天皇杯全日本選手権

J1 大宮に健闘も惜敗

【県立カシマサッカースタジアム（茨城県鹿嶋市）で小宮山瑛生＝社会学類3年、写真も。12面に関連写真】サッカーの天皇杯全日本選手権の第4回戦が行われ、筑波大はJ1の大宮アルディージャに0―2で敗れた。筑波大はここまでプロチームのJ3Y・S・C・C・横浜、J1ベガルタ仙台、J2アビスパ福岡に3連勝、更なる快進撃が期待されたが、ベスト16で姿を消した。

ゴール前に攻め込みチャンスを多く作った中野（左）（9月20日、大宮アルディージャ戦で）

サッカー

ベスト8進出ならず

試合の序盤、大宮が攻め込む展開が続いた。相手が長くボールを保持する時間が続いたが、山川哲史（体専2年）や鈴木大誠（同3年）らDF陣が体を張ってゴールを守った。だが、前半28分、大宮の清水慎太郎がペナルティーエリア内で放ったシュートが山川の手に当たってしまいPKを取られた。これを清水に自ら決められ、筑波大は天皇杯で初めての先制を許した。

その後も、大宮の攻撃は激しさを増した。35分、40分にはPKを決めた清水が立て続けに筑波大ゴールに迫ったが、GK阿部航斗（同2年）の好セーブもあり0―1で前半を折り返した。

「前回のアビスパ福岡戦では後半から良い攻撃の形が作れていたので、今回もじっくりと攻めていこうと考えた」という中野誠也（同4年）の言葉通り、後半は何度も相手ゴールを脅かす攻撃を見せた。後半17分にはこぼれ球を三笘薫（同2年）がゴール前まで運ぶと、混戦の中ボールを受けた会津雄生（同3年）がペナルティエリア外からシュートを放つも、わずかにゴール左へとそれた。

ドリブル突破する三笘（9月20日、大宮アルディージャ戦で）

続く28分には更なるチャンスが訪れる。相手のパスミスに中野が素早く反応した。ボールを相手陣深くで奪い、そのまま相手を振り切りミドルシュートを放った。ボールは速いスピードでゴールへと向かったが、惜しくもクロスバーに当たりノーゴール。初得点とはならなかった。その後筑波大は前線から積極的にボールを奪いに行くが、プロの安定した試合運びを前に一点が遠かった。更に試合終了間際に追加点を決められ結果は0―2で敗退。大学勢初のベスト8進出には届かなかった。

試合後の会見で小井土正亮監督（体育系・助教）は「（これまでの）3試合のように自分たちにできることを確実にやるという思いで試合に臨んだし、選手は頑張ってくれた。攻撃の最後の部分でゴールを決めきる力が足りなかった」と振り返った。

中野も「後半はうまく攻撃の形が作れていただけに決めきれなかったのが悔しい。（後半28分の）シュートは蹴った時の感覚がかなり良かったので、確実に決められていたら良かった」と悔しさをにじませた。

一方、「天皇杯での戦いはしっかり守って攻撃につなげる筑波大らしさを発揮できた。多くの人に応援をもらったので、この敗戦は今後リーグ戦やインカレの勝利で返したい」と語った。

相手崩せず4位

関東大学秋季リーグ

ハンド

【国士舘大学多摩キャンパス体育館（東京都多摩市）で豊岡恵＝比較文化学類1年、写真も】10大学で争う関東学生秋季1部リーグが、8月26日から9月24日まで行われた。

前季1位だった筑波大は5勝4敗で4位に終わったものの、全日本学生選手権のシード権を獲得した。また、小澤尚平（体専4年）が優秀選手賞に選ばれた。

9月23日のリーグ最終戦では、隙の少ないディフェンスが持ち味の日本大と対戦。筑波大は相手の固い守りを前にミスを連発し、32―27で敗北した。

果敢にゴールを狙う小澤（9月23日、日本大戦で）

試合序盤は牧野イサム（同3年）の連続得点やGK坂井幹（同4年）の好セーブで主導権を握った。しかし徐々に日本大のペースに持ち込まれ、前半27分には逆転を許した。

その後は「守りの日大」と名高い日本大のディフェンスの固さに苦戦。筑波大は得点を重ねられない焦りで味方まで届かないパスをしたり、ディフェンスに穴を空けるなど、選手同士で適切な距離を取れない状態が続き、リードを許したまま前半を14―13で終えた。

後半では、距離感の修正を図るも、ディフェンスの穴を塞ぎきれず、相手の勢いを止められなかった。筑波大は終盤まで粘り強く得点を試みるも、32―27で敗れた。

坂井は、「序盤機能していたディフェンスが、後半から崩れたのが敗因だと思う。他の選手のディフェンスとしっかり連携する事が今後の課題」と振り返った。

ネメシュ・ローランドコーチ（体育系・助教）は「焦りから生まれた粗いプレーや単純なパスミスが多く見られた。相手のペースを崩せずに、消極的なディフェンスに回ってしまった」と語った。

関東大学秋季リーグ

1部最下位に

バドミントン

【日本体育大学健志台キャンパス（横浜市青葉区）で明石尚之＝体育専門学群2年、12面に関連写真】6大学で争う関東大学秋季リーグが9月13―18日まで行われた。筑波大は男女ともに1部6位に終わった。その結果24日に1部と2部の入れ替え戦が行われ、男女ともに勝利して1部残留となった。女子はリーグ戦5連覇していたが、10月の全日本学生選手権（インカレ）に向け不安な結果になった。

女子は18日のリーグ最終戦、勝ち点が並んでいた法政大との対戦に1―4で敗北した。

第1シングルスでは加藤美幸（体専4年）が0―2でストレート負け。「負けたら入れ替え戦というプレッシャーに押された」と加藤。第2シングルスの安田美空（同2年）は相手と1ゲームずつ取り迎えた最終ゲームで、デュースまでもつれた末、ラスト1点で強気にいけず1―2で惜敗した。

シングルスを2つ落とし、後がなくなった筑波大は続く第1ダブルスでは加藤、柏原みき（同4年）のペアが安定した試合運びで勝利するも、第2ダブルスで安田、山中芹里（同3年）のペアが序盤の失点を返せず、0―2で完敗した。結果、1―4で最終戦を落とし、6連覇とならず、1部最下位まで沈んだ。

女子主将の柏原は「1年生の時から負けたことがなかったので悔しい。一人ひとりの弱さが見えた試合だった」と振り返った上で、インカレに向けて「チームで勝つことがいかに難しいことがわかった。インカレは負けたら終わりのトーナメント戦。一人ひとり勝つための努力を積んでいきたい」と語った。

記録ファイル

◆陸上　日本学生対校選手権（9月8―10日、福井運動公園陸上競技場）

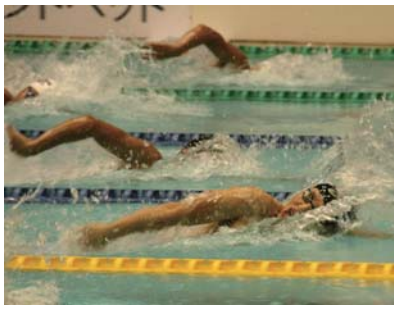
【女子】▽円盤投げ　辻川美乃利（体専4年）＝1位

日本学生選手権

女子 2年続けてシード権

【東和薬品ラクタドーム（大阪府門真市）で明石尚之＝体育専門学群2年】大学日本一を決める日本学生選手権（インカレ）が9月1―3日に行われ、筑波大は男女とも団体校で出場。大学ごとの総合成績で8位までが来年度のシード権を得る今大会では、女子が5位でシード権を獲得した一方、男子は9位だった。

水泳競技



男子800㍍フリーリレー予選で快調に飛ばす猪狩（手前）（9月3日、東和薬品ラクタドームで） ＝水泳部提供

■女子

16種目の総合成績で競う団体校として13選手が出場した女子は、総合274点で昨年同様5位となった。

各種目では1日の女子50㍍自由形で、8月のユニバーシアード競技大会（台湾）で自己ベストを更新し、好調の岡野圭穂（体専3年）が貫禄の泳ぎを見せ、25秒33で優勝。また、同種目では平山友貴奈（同4年）が25秒64の自己ベストを更新して2位につけた。

2日の女子100㍍バタフライでは、平山が58秒87で目標としていた58秒台を達成して優勝。予選で好調だった平田茉穂（同2年）は決勝でも自己ベストを大きく上回る59秒29で2位となった。

■男子

男子は8月の関東学生選手権の好成績から、5年ぶりに団体校として19選手が出場、161・5点で総合9位だった。8位の法政大に20・5点及ばずシード権獲得には届かなかった。

各種目では1日の400㍍フリーリレー（400㍍）予選で、第一泳者の三浦遼（同4年）の50秒76を含め4人全員が50秒台中盤で泳いで6位。決勝に進出するも7位に終わった。また、3日の800㍍フリーリレー（800㍍）予選では猪狩雄哉（同2年）が第一泳者で1分50秒84の好タイムを出したが一歩届かず、9位で決勝進出を逃した。

また同日の200㍍平泳ぎでは、ユニバーシアード代表の大久保琳太郎（同3年）が同種目の世界記録保持者である渡辺一平（早稲田大）に1・50㍍まで迫ほぼ同タイムで健闘。2分10秒28で2位に入った。

男子 惜しくも9位

記者の目

シード権内には届かなかった筑波大男子勢だが、仙石泰雄監督（体育系・助教）は「最終種目の800㍍までよく戦った」とたたえた。一方で主将の渡会舜（体専4年）は「弱くなったことを証明するため、何が何でもシード権を獲得したかった」とも振り返った。

団体では、個人ごとの記録がチームの総合得点として加算される。そのため、「個人校として出場した」昨年と比べ、一人ひとりが「より記録にこだわるようになった」（渡会）。特に個人種目の倍の得点が与えられる重要な種目であるリレーでは、部内での熾烈なメンバー争いが起こった。

中でもバタフライが専門の猪狩雄哉（同2年）は自由形（クロール）に練習時間を十分に避けない中で、今年に入って急激に調子を上げ、400㍍アンカー、800㍍では第一泳者を任された。

結果は課題が残るものだったが、猪狩は「来年はこの経験を生かしてより高い順位を目指したい」と先を見据える。

仙石監督も「本気でシード権を狙いにいったことはいい経験になった。練習のつけられながらも、試合終盤に鋭いショットを多く決め、形勢を逆転。2―1で勝利し、ダブルスの試合開始から9時間を超える厳しい戦いを制した。

米原は「2セット目は相手の調子が上がってきたと同時に隣のコートで行われていた牛島や森崎可南子（同3年）の試合結果に気を取られた。ただ、最後は勝利への気持ちの強さが相手を上回った」と話した。

三橋大輔監督（体育系・准教授）は「ネットにかけるミスなどが多い点は今後の課題だが、今回のような勝利は大きな収穫だった」と話した。

方向性は間違っていないと感じるので、自由形の強化などを中心に一歩ずつ進みたい」と意気込む。

本選手権で部を引退した渡会は「本来水泳は個人戦だが、団体校で出場する場合、タイムだけにこだわるのではなく対戦相手を意識した戦略も必要。来年に向け、後輩にもその重要性を感じて欲しい」と話した。

シード権獲得に向け、ようやくスタートラインに立った筑波大。今回の結果をばねに、更なる躍進を期待したい。（明石尚之）

「タイブレーク」制す

首都大学野球秋季リーグ

野球

【牛久運動公園野球場（茨城県牛久市）で前名裕一＝社会学類3年】6大学が優勝を争う首都大学秋季1部リーグが9月2日から行われている。昨季リーグで2位だった筑波大は4勝3敗で3位につけている（9月28日現在）。

16日の試合では昨季リーグでは5位だった明星大と対戦。2―2で迎えた延長13回に3点を入れ、5―2で勝利した。

筑波大は2回裏、先発の大場遼太郎（体専4年）が死球と暴投で走者を2塁に置いた後、中前安打を打たれ先制された。だが4回表に中島準矢（同3年）の左前安打や、明星大の守備の乱れで走者を1、3塁に置くと、松谷竜暉（同4年）が中前安打を放ち同点に追いついた。

その後は両チームともに8回裏まで点がらなかったが8回裏、9回表に明星大と筑波大がそれぞれ1点を入れ、2―2で試合は延長戦に突入した。

その後も得点は入らず、延長13回に1死満塁から攻撃を始める「タイブレーク」という、学生野球ではめずらしい展開に。筑波大は松谷の2点を挙げる右前安打と種子島大輝（同3年）の犠打で3点を積みかけ、勝勝を目指したい」と話した。

ち越した。松谷は「打った感触は悪かったが、ヒットになってうれしい」と話した。

その後は12回から登板した村木文哉（同1年）が相手打線を無得点に抑え、5―2で勝利した。

川村卓監督（体育系・准教授）は「試合全体を通して明星大の投手に翻弄され狙い球を絞り切れず、得点できなかった。今後も打線をつなぎ確実に得点することや、守備のミスをなくすことを意識して、リーグ優

女子 4勝1敗で準優勝

2年連続で王座出場果たす

関東大学リーグ

今リーグ初勝利を飾った並木（奥）・牛島ペア（9月11日、慶應義塾大戦で）

テニス

【早稲田大東伏見三神記念テニスコート（東京都西東京市）で岡田優太＝社会学類3年、写真も】6大学で争う関東大学リーグが9月4―20日まで行われた。昨年2位の筑波大女子は4勝1敗で準優勝に終わった。同時に10月10日から行われる大学テニス団体戦の日本一を決める全日本大学対抗王座決定試合（王座）への出場権を2年連続で獲得した。

9月11日には昨リーグ3位の慶應義塾大と対戦。今リーグ2勝同士の試合となった筑波大は、全7試合のうちダブルス2勝、シングルス2勝3敗の計4勝3敗で接戦を制した。

第2ダブルスには今リーグで勝利が無かった並木友花（体専4年）、牛島咲（同3年）ペアが出場。並木のボレーや、牛島のスマッシュなどネット際での攻撃が要所で決まり、2―0で今リーグ初勝利を収めた。

ダブルス2勝で迎えたシングルス1試合目は千村もも花（同1年）が相手の低く深いボールに苦戦。自身のミスもあり1―2で敗れた。

その後シングルスは1勝3敗で計3勝3敗となり、勝敗はシングルス5試合目絵の米原実令（同4年）に託された。第1セットは、終始自身のペースで試合を進め先制。しかし第2セットはボレーミスやチャンスボールをネットに掛けるなど、自身のミスが目立ち、6―7で落とした。迎えた最終セットでは相手に差を

7試合9時間の熱戦制す

縄跳びの奥深さ伝えたい

競技縄跳び 元世界記録保持者

関康平（工シス1年）

2012年の世界ロープスキッピング（縄跳び）選手権12～14歳の部門で、制限時間内で跳べた回数を競う「30秒スピード」、「3分スピード」の種目でそれぞれ1位、3位に名入賞した。また音楽に合わせて技を披露し、難易度や美しさを競う同部門の「フリースタイル」で5位に入賞。3種目の合計得点を争う総合で2位に輝いた。

14年に行われた同大会15歳以上の部の「30秒スピード」では、当時の世界新記録の103回で優勝した。「本番の30秒間はとても緊張したが、最後まで集中できた。一番高い表彰台に上がった時『自分が世界で一番速いんだ』と実感した」と当時を振り返る。

つくば市吾妻出身で、競技縄跳びとの出会いは小学2年生の時だった。体育の授業にゲストで登場した縄跳びアジアチャンピオン、粕尾将一さんの演技に、それまでの縄跳びのイメージを覆され

た。単調なイメージの縄跳びとは大きくかけ離れた、アクロバティックな演技に魅了され、粕尾さんの縄跳び教室に通い始めた。

競技縄跳びの腕はすぐに上達。小学4年で全日本ロープスキッピング大会に出場した。初戦敗退に終わったが、「悔しさは感じなかった。自分も上り詰めてやるぞと気合いが勇いた」とますます練習に打ち込んだ。

小学校卒業を機に、藤田惇平（現応理2年）らの縄跳び教室OBの4人でチームを設立。16年にスウェーデンで行われた世界大会では、4人そろって技を披露する「チームフリースタイル」の種目で1位を獲得した。現在もさまざまな大会への出場の傍ら、地元の小学校で縄跳び教室を行うなどの活動を行っている。

高校、大学受験の際は競技から離れ勉学に専念し、その度に「このまま競技縄跳びをやめてしまおうか」と頭をよぎった。しかし、世界の頂点に立った時の感動や興奮が、そして縄跳びが好きだという気持ちが

最先端のVR技術を体験

JAPAN VR EXPO 企業や学生が出展

「ムーンジャンプ」を体験する来場者（9月14日、エンパワースタジオで）

バーチャルリアリティ（VR）の最先端技術を広めることなどを目的に、研究機関や企業、学生などがVRを使った作品を公開する総合展示会、「JAPAN VR EXPO」（日本VR学会など主催）が9月14－16日、筑波大学にあるエンパワースタジオで開催され、約600人が来場した。

会場では、筑波大エンパワーメント情報学プログラムなどによる48作品を展示。作品の一つ、岩田洋夫教授（システム情系）の「ムーンジャンプ」はエンパワースタジオ内に設置されたウイヤーを使い、月面と同じ重力でのジャンプを体験できる。「自然に飛んでいる感覚の再現と、ジャンプによる月面上での視点移動にこだわった」（岩田教授）といい、体験した男性は「ジャンプする勢いが強く、楽しかった」と話していた。

また会場では第25回国際学生対抗VRコンテスト（日本VR学会主催）の予選大会も行われ、筑波大工学システム学類の学生団体は、ルービックキューブ型の物体をひねるとディスプレイの中の消しゴムの形などが変形する「なんでもルービックキューブ」を出展。審査により10月28、29日に日本科学未来館（東京都江東区）で行われる決勝大会への進出が決まった。

作品の作成者の1人、伊藤弘一郎さん（エシス4年）は、「顔に装着する型のVRは小学生以下の子供が利用できないので、誰にでも楽しめる作品を作りたかった」と話した。

展示会の責任者を務めた岩田教授は「研究者から一般の家族連れまで幅広い来場があった。学生と産業界、クリエーターの間で新たな交流ができたのも収穫だった」と話していた。（佐藤巧基＝物理学類2年、写真も）

野菜について学ぶ

小学生が野菜について学ぶ「知に行こう！野菜とあそぼう！ ねっしーと夏の観察会」が7月22日に筑波大学で行われた。同大の「ねっしー・自然教育研究会」が主催し、小学生24人が参加した。

午前中は、畑の観察会。参加者らは学内の畑で、ナスやトマトなどの夏野菜の育ち具合を観察したほか、クイズを通して野菜の知識を学んだ。

午後は学内のキャンプ場に移動し、同会員と参加者らは夏野菜カレーなどを作って味わっていた。

最後は「野菜スタンプ」作り。参加者らは輪切りにしたオクラの断面を使って星型のスタンプを作るなど、盛り上がっていた。

千葉市から来たという小学1年生の女子児童は「野菜が実際に畑で育つ様子を間近で見れて、楽しかった」と話していた。

責任者の山田綾音さん（生資2年）は「今後も継続して企画していきたい」と語った。（木村誠、写真も）

作成した野菜スタンプを使う小学生たち（7月22日、筑波大学で）

各学類で対応分かれる

印刷費高騰 学生から困惑の声も

【1面参照】筑波大学生が大学で使う全学計算機システムの印刷単価が高騰したため、5学類で学生の印刷上限枚数が削減されたことについて、各学類の学類長や学生に話を聞いた。

印刷上限枚数を8月、当初の1000枚から200枚に減らし、学生の要望で最終的に500枚に戻した社会学類。土井隆義学類長（人社系・教授）は、「他の予算を削減し、費用に充てている」と話す。だが、ある女子学生は「ゼミなどで使う資料を大量に印刷していたので削減は困る」と困惑した表情を見せた。

一方、人文学類は学類予算の予備費や、授業で使う用具更新の予算などを削ることで印刷枚数を年度当初に設定した1000枚に維持。大倉浩学類長（人社系・教授）は、「年度途中の印刷枚数の削減は学生を混乱させる。学生の教育を支えるために枚数は維持するが、予算は厳しく、学生には不要な印刷は控えるよう求めたい」と話す。

生物学類は現在、200枚を上限枚数に設定だが、今回の通知を受け、来年度は上限を学術情報メディアセンターが負担する印刷枚数（今年度は100枚）だけにし、学類では負担しないことを検討中だ。千葉智樹学類長（生環系・教授）は「学生が印刷する内容が学類で負担すべきものか検証できないため、来年度の上限枚数は学類負担が発生しないように設定したい。レポート提出はウェブ上などで行うよう教員に呼びかけている」と話した。

これに対し生物学類のある女子学生は「実験でレポートを書くことが多く、200枚では余裕がない。学類によって印刷上限枚数に差があることも不満」と話す。一方、やはり1200枚から800枚への削減があった数学類の男子学生は「同システムの印刷機をあまり使わないので、印刷上限枚数が減らされてもそれほど影響はない」と話していた。

上限枚数が削減された5学類

学類	削減前		削減後
社会	1000 枚	→	500 枚
地球	1200 枚	→	800 枚
数学			
物理			
化学			

児童が医療の現場学ぶ

手術体験や人工呼吸器の操作も

小学生に、医療分野に興味を持ってもらうイベント「つくばキッズメディカルユニバーシティ」が7月28日に筑波大学附属病院で行われた。医師や看護師の職業に興味を持つ子どもが多い一方で、他の職業と比べて実際に職業を体験できる場が少ない。そこで、医療現場で使用する本物の機器に触れながら職業をより深く知ってもらう目的で2012年から毎年開催されている。今年は100名を超える応募者から抽選で選ばれた30人が参加した。

イベントでは医薬品の開発過程や効用の仕組みを学ぶ薬学セミナーや、採血や検温など看護師の仕事を学ぶ看護セミナーなど4つのセミナーを開設。イベントの最後に開かれた外科セミナーでは、参加者全員が手術着に着替え、メスを使ってブタの心臓に人工弁を取り付ける手術の体験や、人工呼吸器や補助人工心臓などの医療機器を操作した。

将来、看護師になりたいという参加者の1人は「特に外科セミナーでの、人工の皮膚を糸で縫う体験が楽しかった。さまざまな体験ができてよかった」と語った。

同イベントを企画した松原宗明講師（医学医療系）は「医療に興味を持つ子どもは多い。参加した子どもたちから一人でも医療分野に進む人が出てきてくれればと」と話した。（岡田優太＝社会学類3年、写真も）

人工の皮膚での縫合作業を体験する児童（7月28日、附属病院で）

受験生ら多数参加

「受験生のための筑波大学説明会」が8月5－6、11日に開催され、学群・学類ごとに模擬授業や施設の紹介、学生による進路相談などが行われた。気温が30度を超える猛暑が続いたが、全国から多くの高校生が訪れた。

5日の知識情報・図書館学類の説明会では、吉田右子教授（図情メ系）による日本と北欧の図書館の違いなどを説明する模擬授業が行われた。同教授は、北欧の図書館でよく行われる、市長と住民の座談会などを紹介。参加した女子高校生は「いろいろな国の図書館と比べると、図書館は単に本を読むためだけの場所だという自分のイメージが変わった」と話していた。

11日に行われた日本語・日本文化学類の説明会では、学生による学類の説明や模擬授業のほか、学生と昼食を取りながら大学受験や日々の学生生活などを話し合うランチミーティングが行われた。参加した女子高校生は「実際に学生と話すことでパンフレットや、学類のホームページだけでは知ることのできない学生生活や授業、留学などの話を聞くことができた」と満足そうに話していた。（中村瑞歩＝日本語・日本文化学類1年）

異国の教室から

イギリス人の人生の楽しみ方

サウス・アンド・シティカレッジ・バーミンガム（英国）　柳田周造

皆さんはイギリス人と聞いてどのようなイメージを抱くだろうか。「紳士」、「紅茶」、「傘をささない」などのイメージが頭に浮かぶと思う。それらはどれも間違っていない。しかし、私が約半年間英国で生活をして一番感じるイギリス人のイメージはそれらとは異なる。私にとって彼、彼女らは「人生を楽しむ達人」である。

私が渡英した直後に導入されたので詳しくは分からないが、日本では毎月最後の金曜日にいわゆる「華金」を謳歌してもらおうと「プレミアムフライデー」なるものがスタートした。私がネットニュースなどで情報を得ている限りでは、効果が顕在しているのかは微妙であるらしい。

おそらくこの実情をこちらで生活を送る人間に話せば、鼻で笑われたり驚かれたりするであろう。こちらの文化では「華金」を謳歌するのは当たり前であり、金曜夜のどんちゃん騒ぎがない人生は考えられないのである。金曜日の仕事は午前中ないしは午後3時程度で切り上げ、いそいそと帰宅する。学生の私より先にパブで杯を掲げている大人だっている。金曜日の夜11時ごろは街によっては平日の日中と変わらないのではないかと思えるくらい外に人間がいる。電車やバスも平日の朝と同じくらい混雑している。皆が顔を紅潮させ思い思いの「華金」を楽しむ。

この文化の背景には「自分の人生、自分の思うように楽しもう」という考えが色濃く存在している。この国に住む人間は、いかに自分の人生を楽しく過ごそうかを至上命題として生きている。そこには「人生こうしなくてはいけない」や「このような生活が理想である」というような考えは一切ない。自分の就いている仕事がつまらないと感じたら転職をし、勤務中に退屈したらお客さんと雑談を楽しんだりする。自分たちの人生を一分・秒たりとも無駄にしまいという意識を常に持って生きている。

レストランなどで料理が提供されたときには「食事を楽しんでね」と言われる。友人と立ち話をしたりした後の去り際には「一日を楽しんでね」、「いい年後を過ごしてね」などと声を掛けられる。この国の人たちは自分のやりたいことをする人生の楽しさ、素晴らしさを知っているからこそのように声を掛けられるのだろう。そのように声を掛けてくれる人たちはもちろん楽しそうだし、心に余裕があるように見える。

最近、日本では「働き方改革」や「過労防止」などの話題が活発に議論されている。勤務時間の縮小、有給取得率の向上など、どれも重要であることは間違いないであろう。しかし、制度などを整備する前に我々の気の持ち方を変えようとしてみても良いのではないだろうか。その答えやヒントは英国に住む人たちが示してくれている。自分の人生を自分の思うように楽しめばいいのである。（人文学類4年）

チェコで「笑劇」の狂言公演

「面白いからまず見て」の姿勢

【プルノ（チェコ）で田中開＝教育学類4年、写真も】チェコ第2の都市・プルノの中央広場前。8月31日、日本古来の笑劇である狂言を演じるチェコ人の団体「なごみ狂言会」が、チェコ語で「千鳥」など3演目を披露した。訪れた市民は約200人。発足から10年以上の同団体は、過去にもチェコ内外で400以上の公演を行ってきた。一体、欧州人に狂言はどう映るのか。筑波大学で能と狂言を学ぶ記者が同団体の招きで現地を訪れ、その練習や講演の様子を取材した。

舞台は広場前の旧修道院中庭に設置された。冒頭、挨拶したのは、1977年生まれのオンジェイ・ヒーブル同会代表。2002年の同志社大留学中、狂言師の茂山七五三氏に師事し、帰国後に師匠の名にちなむ同会を立ち上げた。茂山氏らは定期的に同国に訪れ、会員約10人のチェコ人に稽古を付けている。

「千鳥」で酒を取り合う太郎冠者（左、ヒーブル氏）と酒屋（8月31日、プルノで）

演目は狂言の代表的な登場人物「太郎冠者」が主役の「千鳥」のほか、「口真似」と「濯ぎ川」の3本。「千鳥」は、主人から後払いで酒を買って来いと命じられた太郎冠者と、たまった酒代を清算しないと酒を譲らないという酒屋の話。ヒーブル代表が演じる太郎冠者はあらゆる手を使って酒樽を持ち去ろうとする。

チェコは国民一人のビール消費量が世界一で、客席からは至る所で大きな笑いが。立場が違う2人が酒に執着する姿のおかしさは、チェコ人にも確かに伝わっていた。

欧州見聞録

休憩後の「濯ぎ川」では、ビール片手に客席に座る観客が自立った。日本にはない光景だが、ヒーブル代表は「観客が自由に狂言を楽しむ証拠と歓迎する。「濯ぎ川」は、恐妻と妬にされる。婿はさきやかな反抗を試みるが効果なし。体格の良い同氏の終始情けない様子に、客席は笑いの連続。同氏も公演後、「恐妻も姑も世界共通」とほほ笑んだ。

前日の練習では、指導の茂山宗彦氏がメンバーの完成度の高さに笑い転げる一幕も。「彼らはもう立派な狂言師」と賞賛した上で、心情の表現法や声の出し方などを入念に指導した。

狂言は日本では、シリアス色の強い能とともに演じられ、「伝統芸能で敷居が高い」というイメージが強い。だがヒーブル代表は公演の宣伝文に「日本」や「伝統」などの文字を書かない。「面白いからまず見て」の姿勢だという。代表は「狂言の面白さは翻訳しただけで国境を超えられる。その価値に日本人は気付いてもいい」と話していた。

好演に拍手を送る観客

◆

公演後、チェコビールと狂言の「共演」に酔いしれた様子のある男性客は「チェコ人はユーモアの効いた皮肉が好き。狂言は格好の娯楽だ」と話していた。日本から遠く離れたチェコ、その観客らの底抜けに明るい笑い声に、狂言の本来の魅力を改めて感じた。

「シェアトレ」学生団体の頂点に

サッカー練習法のサイト運営で

優秀な学生団体を決める体総選挙」が7月9日に東京大学伊藤学術研究センターで開かれ、筑波大学蹴球部の木村友輔さん（体専3年）が代表を務める会社「シェアトレ」が総合グランプリに輝き、約600団体の頂点に立った。同社はサッカーの練習法を動画と共に投稿し共有するサイト「シェアトレ」を運営している。

同イベントは全国の学生団体をビジネス、教育など8部門に分類。活動内容や今後の展望などについてプレゼンテーションを行い、各部門でのグランプリを決めたうえで、その中から総合グランプリを決める。入賞団体には総合グランプリで100万円、部門ごとのグランプリで20万円、準グランプリで10万円の副賞が贈られるほか、同イベントの協賛企業からの支援が得られる。

同サイトは木村さんを含む4人の学生が運営、昨年12月に、正式に運用を開始した。サイト作成のきっかけは、木村さん自身が地元サッカーチームに指導を行った際に難しさを感じたこと。今年6月には月間閲覧数が20万を超え、7月には日本サッカー指導者協会とのウェブパートナー契約を行うなど、活用の場が広がっている。

同サイトの特徴は投稿された練習法に会員が改善点をコメントできること。従来の単に練習法を発信するサイトとは違い、指導者同士が意見を交換できる場になっている。

今回の受賞に木村さんは「今まで活動してきたことが評価されてうれしい。今後も活動を通して、指導者の技術向上に貢献したい」と話した。（小宮山崚生）

児童ら将棋競う

筑波大将棋部も協力

つくば市内に住む小中学生が将棋の腕前を競う「つくば小中学生将棋大会」が8月11日、つくばカピオ（つくば市竹園）で開催された。大会には24人が参加し、熱戦を繰り広げた。

同大会は筑波大学将棋部の協力で開催されたもので、今年で3回目。今回からはこれまでの単一だった部門が初心者部門と上級者部門に分けられ、それぞれトーナメントが行われた。

上級者部門で優勝した中学2年の大前吾継（ごけい）思さんは「苦しい将棋が多かったが勝ててよかった。頑張って強い人に勝てるようになりたい」と話した。

また、大会の終了後には上級者部門の上位5人と筑波大将棋部の選抜メンバーとのエキシビションマッチが行われ、3勝2敗で筑波大チームが勝利した。大前さんに敗れた中山香介さん（電物1年）は「勝負の中盤から形勢を損ねてしまった。完敗だった」と話していた。

同大会の運営メンバーの一人、小山寛人さん（社学2年）は「参加者の方に楽しんでもらえてよかった。また来年も開催したい」と語った。（中村瑞歩）

盆LIVE開催

和楽器やバンドの生演奏に合わせて市民らが盆踊りを楽しむ「盆LIVE」が9月16日に研究学園駅前公園（つくば市竹園南）で開催された。国籍や年齢に関わらず、つくばで生活する人が集まる場を作ろうと、筑波大生らが企画したイベントで、3回目の今回は約500人が参加した。

同イベントは3部構成。第1部では太鼓や鼓（つづみ）などの囃子（はやし）などに合わせ、つくば市吉瀬周辺に伝わる盆踊りやつくば音頭を踊った。続く第2部では洋楽やアニメの作中歌や、第3部ではバンドの生演奏による「カントリーロード」などの曲に合わせて踊った。

会場ではつくば市内のゴスペルサークル「コーロリコELG」やフラダンススクール「マカナアロハ」によるパフォーマンスも行われ、会場は終始大盛り上がりだった。

参加した男子小学生は「知っている曲が多く、演奏に合わせて踊れたので楽しかった」と話していた。

実行委員長の喜瀬沙織さん（比文3年）は、「雨が降るハプニングはあったが、無事に終わることができた。参加者が楽しそうに踊ってくれて本当によかった」と話した。（佐藤巧基、12面に関連写真）

漫画研究会

「漫画を通じて成長できる」

今年8月、東京ビッグサイト（東京都江東区）は、来場者の熱気で息の詰まるような暑さだった。開かれていたのは約50万人が集まる日本最大級の同人誌即売会「コミックマーケット」。数あるブースのひとつに会誌の『にじますく』が並んでいた。約180ページ。ギャグや恋愛ものからファンタジーまで全21作品の多彩な漫画が揃う。

会誌発行は年7回。32人の会員は、週2回会誌作成で集まる。話し合いは和気あいあいとした雰囲気で、会長の髙橋智衣子さん（比文3年）は「漫画を描くのは一人でもできるが、同じ趣味を持った会員たちと一緒に絵を描いたり、他愛ないことを話したりするのが楽しみ」と話す。

漫画研究会の活動の様子（8月8日、文化系サークル会館で）

会の魅力の一つが年1、2回行われる「ネーム交換企画」だ。ネームは、コマ割りや台詞、キャラクターなどを大まかに描いた漫画の設計図。これを基に原稿を作成する。趣味で漫画を描く場合はネームを書いた人が最後まで一人で仕上げる場合が多いが、企画ではくじ引きで選ばれた人が他の参加者のネームを元に漫画を描く。

企画に参加した三村明日香さん（生物2年）はアザランが人間となる地球温暖化解決のために大学に通うというストーリーを考案。ネームをMrさん（ペンネーム）に託した。ネームはMrさんの手で、スクリーントーンを多く使い凝った演出の作品に仕上がった。三村さんは「自分のネームを他の人が描くとどうなるのか気になり企画に参加したが、人によって漫画の作り方が異なるので、勉強になる。完成した作品は細部まで細かく描かれていて、とてもうれしかった」と笑顔を見せる。

時にはお互いの漫画を批評し合うことも。会員らは「他の人からアドバイスをもらうことで、読みやすいコマ割りにしたり、ストーリーに合わせて台詞を変えることもある」と話す。

会員同士で一緒に作品を作ったり、批評しあうことは漫画の奥深さを知り、より質の高い作品づくりにもつながる。それは同時にお互いを深く知るよいきっかけにもなる。会員たちは「漫画を通じて成長できる」と話す。

漫画は作者自身の投影でもある。会員たちは漫画を通じ、自分をさらけ出す。彼らの顔は凛々しく輝いていた。（佐藤巧基＝物理学類2年、写真も）

Who's Who?

全国競技かるた水沢大会で優勝

手塚 亮太 さん（人文3年）

集中力を高め、読まれた札を取る手塚さん（9 月 28 日、文化系サークル会館で）＝佐々木悠里撮影

9月24日、年間約50回ほど開催される競技かるたの公式戦の一つ「全国競技かるた水沢大会」（岩手県奥州市）を制し、初めて競技の最高峰である「A級」の選手らの頂点に立った。

競技かるたは、小倉百人一首の100枚のうち、ランダムに選んだ50枚のみを使う。相手陣と自陣に下の句の札を25枚ずつ置き、競技者は読み手が読む上の句を聞いて畳に並べられた下の句の札を払う。原則的に自陣の札が圧倒的に取りやすいため、自陣の札を確実に取り、相手陣の札をいかに「抜く」かが勝負になる。「抜く」と自陣の札を一枚相手陣に送れる。自陣の札が先になくなった方が勝ちだ。

かるたに出会ったのは小学5年生。地元・宇都宮市の大会にクラス全員で出場したことがきっかけ。かるたを少しでも速く取ることに夢中になった。

その際の楽しさが忘られず、中学校ではかるた部に入部。本格的に競技かるたを始めたが、初心者の大会では一度も勝てなかった。ただ「かるたへの情熱は冷めなかった」

高校でもかるた部に。1年生の7月に行われた全国大会の団体戦に自らは出場できなかったが、先輩たちの戦いに衝撃を受けた。「全国の実力を目の当たりにした。強くなりたいと思った」

先輩が同時期にA級に昇格したことも刺激になった。「届かないと思っていたA級も、努力次第だと感じた」。同期5人と練習試合を繰り返し、持ち味の札を取る速さと集中力を磨いた。

2年生の冬には念願のA級に昇格したが、壁に当たった。A級の大会に出場しても、2回戦までで敗退。思うように勝ち進めなかった。「A級の大会では相手の迫力にも押され、緊張から普段通りできなかった」

3年7月の全国大会。5人が横並びで戦う団体戦では、中央でエースとして仲間を牽引した。順調に準決勝戦まで進むと、2年連続敗北が続いていた強豪・暁星高校と対戦した。勝負は1勝1敗と進み、自身を含めた残り3人が、自陣と相手陣に一枚ずつ札が残る「運命戦」に。自陣の札が読まれれば確実に取れるため、実力ではなく札の出る順序で勝敗が決まるが、結果は運に恵まれず敗北。4位に終わった。

大学進学後も歌留多部に入部。当初から「A級の大会で結果を残したい」と考え、遠方の大会にも積極的に参加した。個人戦では苦戦続きだったが、昨年の12月の大会では初めて決勝に進出。「諦めず練習してきたことが、結果に結びついた」と感じた。

今年8月の大学選手権でもエースとしてチームを引っ張った。「高校でできなかった全国優勝をしたい」と意気込み臨んだが、団体では1回戦で強豪の立命館大に敗退。個人戦も3回戦で敗れたが、「敗戦を通して自分の弱点を見つめ直す必要を感じた」という。

その後は弱点の克服に取り組んだ。上の句の数文字目まで聞いただけで、どの句かわかる文字数を「決まり字」というが、この際の取り方を改善。耳のいい相手は「決まり字」の子音を聞いて、どの句か判別できる。だが「耳のいい方ではなかった」ため、その札を部員に多く読んでもらい、読み手の呼吸や読み方を細かく分析。少しでも早く取れるよう練習を積んだ。

迎えた9月の水沢大会、順調に進んだ4回戦。格下相手にあと1枚で負ける状況に追い詰められた。そこで発揮したのは「決まり字」での判断力。見事に逆転勝ちを収めると、勢いのままに悲願の初優勝を成し遂げた。

「かるたが好きな気持ちは誰にも負けない」（佐々木悠里＝人文学類3年、小宮山瑛生＝社会学類3年）

札を取ることに夢中だった
好きな気持ちは誰にも負けない

編集後記

今夏。Jリーグのプロチームや都道府県代表などが参加するサッカーのトーナメント「天皇杯」での筑波大学蹴球部の快進撃がありました▼仙台戦は仙台、福岡戦は水戸、大宮戦は鹿嶋と、現地で取材しました。プロチームのスタジアムや応援の雰囲気、すべてが新鮮でした。その中で筑波大はプロチームを次々と撃破。結果にベスト16に留まりましたが、大勢の記憶に残りました▼私が蹴球部の担当となったのは一昨年の秋。蹴球部は関東1部リーグから創部初めて降格し、2部で戦っていました。厳しい状況の中でも、勝利を目指しプレーする姿に感銘を受けました。そして格上チーム相手の天皇杯、果敢に挑む姿勢に再び感銘を受けました▼天皇杯は敗退となりましたが、今後も多くの試合が行われます。記者として、更なる熱気を伝えていきます。（編集長・小宮山瑛生＝社会学類3年）

次号は
11月6日（月）
発行予定です

日本語教科書シンポジウム

学内総合

教科書を手に取る参加者ら（9 月 10 日、情報メディアユニオン棟で）＝越智小夏撮影

2面へ

サッカー 天皇杯ベスト 16

スポーツ

ドリブル突破をはかる西澤健太（9 月 20 日、県立カシマサッカースタジアムで）＝小宮山瑛生撮影

8面へ

バドミントン 関東大学秋季リーグ

スポーツ

サーブの狙いを定める安田美空（9 月 18 日、日本体育大学健志台キャンパスで）＝明石尚之撮影

8面へ

盆 LIVE

学生生活

バンドの生演奏に合わせて踊る参加者（9 月 16 日、研究学園駅前公園で）＝池田花於里撮影

11面へ